

山王若宮遺跡

老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



柏川村出土文化財管理センター

山王若宮遺跡

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

山王若宮遺跡は東に旧利根川を背景に、西に広々と広がる前橋台地上の河岸段丘の縁上に位置しています。

この付近一帯は、古墳が多数存在し、広瀬古墳群としても名高いところです。かつての古墳群も団地造成や耕地整理等のため今は平たんな土地となり、当時の姿を知らない子供たちや移転してきた市民にとっては、いにしえの面影は想像できないことでしょう。

そのような土地に老人保健施設が建設されることとなり、それに先立って今回の発掘調査を行いました。

約1,000m²という狭い土地から4世紀中ごろから後半にかけての住居跡14軒、6世紀後半から7世紀の古墳7基等の遺構、土器、埴輪等が多数発見されました。

古墳は墳丘部が平坦にされており地表面からはわかりませんでした。周堀や墳丘の根石等が残っているだけですが、同時期でありながら埴輪を有するものと埴輪を有しないものがあり、古墳の変遷を知るよい資料になり得ると思っています。

広瀬古墳群には、県内でも有名な天神山古墳が存在しています。そして、今回の調査ではこの天神山古墳と同時期の集落の一部が発見されました。この時期の住居跡の資料を収集することで、天神山古墳、広瀬古墳群の中の古墳を造った人達ではないだろうかと古代への想像が広がる資料となり得るものと考えております。

今回発見された古墳は不完全なもので、発掘調査としては少々残念な気持ちでしたが、住居跡と合わせ豊富な資料は得られたと思っています。

ご一読いただきまして、ご指導、ご助言をいただければ、大変ありがたいと思っています。

平成10年3月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 中西誠一

例　　言

1. 本報告書は、老人保健施設建設工事に伴う山王若宮遺跡発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県前橋市山王町135-1ほかに所在する。
3. 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 中西 誠一 が医療法人社団 清宮医院 理事長 清宮 和之 と委託契約を締結し実施した。
調査担当者および調査期間は以下の通りである。
発掘・整理担当者 飯田祐二・佐藤則和（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）
発掘調査期間 平成9年9月1日～平成9年9月30日
整理・報告書作成期間 平成9年10月1日～平成10年3月25日
4. 本書の原稿執筆・編集は飯田・佐藤が行った。整理作業をはじめ図版作成には、阿部 シゲ子・神澤とし江・桐谷秀子・柳井晶子の協力があった。
5. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

凡　　例

1. 採図中に使用した北は座標北である。
2. 採図に、建設省国土地理院発行の1/2.5万地形図（前橋）を使用した。
3. 本遺跡の略称は9G18である。
4. 各遺構の略称は次の通りである。
H…住居址、M…古墳、D…土坑址、P…ピット
5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。
遺構　　住居址…1/60、古墳…1/100、全体図…1/200
遺物　　土器…1/3、1/4、埴輪…1/5

目 次

序

I 調査に至る経緯	2
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地	2
2 歴史的環境	2
III 調査の経過	
1 方針	6
2 経過	6
IV 層序	7
V 遺構と遺物	8
VI まとめ	16

図版

口絵 山王若宮遺跡出土遺物

- P.L. 1 住居址全景 H-1~4号住居址
- 2 H-5~14号住居址 調査区西部住居址
- 3 古墳全景 M-1~4号墳
- 4 M-7号墳 M-2・4・6号墳周堀 M-4号墳出土遺物
H-4・5・13号住居址出土遺物
- 5 古墳時代の土器(1~14)
- 6 古墳時代の土器(15~24)
- 7 古墳時代の土器(25~27) 墳輪(1~9・13)
- 8 古墳時代の埴輪(10~12・形象埴輪片)

挿 図

	頁		頁
Fig. 1 山王若宮遺跡位置図	1	Fig. 2 山王若宮遺跡周辺図	3
3 周辺遺跡図	5	4 基本層序	7
5 全体図	21・22	6 H-1・6号住居址	23
7 H-2・9・10号住居址	24	8 H-3号住居址、D-1~3号土坑址	25
9 H-4・5号住居址	26	10 H-7・8・11・12・14号住居址	27
11 H-13号住居址	28	12 M-1号墳	29
13 M-2号墳	30	14 M-3・5・7号墳	31
15 M-4・6号墳	32	16 古墳時代の土器（1~10）	33
17 占墳時代の土器（11~16・18・20）	34	18 古墳時代の土器（17・19・21~27）	35
19 古墳時代の埴輪（1~6）	36	20 古墳時代の埴輪（7~13）	37

表

	頁		頁
Tab. 1 土器観察表	19	2 墓輪模索表	20

調査参加者（順不同）

阿部シゲ子 石川 弘 落合忠雄 鹿沼国藏 神澤とし江 桐谷秀子 桜井 弘 高橋 政
中村新太郎 泰良岩雄 原崎サイ 福島透司 矢島アイ子 柳井晶子



Fig. 1 山王若宮遺跡位置図

0 1 : 60,000 2.5km

I 調査に至る経緯

本遺跡の発掘調査に関して、平成9年7月9日に医療法人社団 清宮医院 理事長 清宮和之より山王町内の老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財試掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受け、同年7月17日、前橋市教育委員会文化財保護課で試掘調査を実施したところ、本調査地は遺跡地であることが判明した。そこで、医療法人社団清宮医院 理事長 清宮和之と協議・調整を行い、9年8月11日、前橋市教育委員会あてに本発掘調査の依頼がなされた。前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団はこれを受諾し、9月1日両者の間で本発掘調査の委託契約を締結、9月1日、現地での本発掘調査を開始するに至った。なお、遺跡名称『山王若宮遺跡』の『若宮』は旧地籍の小字名を採用した。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

山王若宮遺跡は、前橋市街地より南東へ約6km、前橋市立山王小学校と道を隔てた北側の前橋市山王町135-1に位置する。前橋台地の東端部に位置し微高地となっている。遺跡地の約30m東は崖となり、崖の下には旧利根川河川敷の広瀬川低地帯が広がっている。遺跡地周辺はかつて佐波郡上陽村であったが、昭和35年に前橋市に合併された。現在は住宅地造成、それに伴う幹線道路の整備等の開発の波が押し寄せ、かつての農村地帯も今では西に広がる水田地帯を残す程度である。特に、住宅地造成においては市街地から比較的近い利点から近年めざましい発展を遂げ、朝倉町から山王町にかけては広瀬団地や山王団地など数多くの住宅団地が立ち並び、前橋市のベッドタウン的な役目を担っている。本遺跡の東側の広瀬川低地帯も閑静な住宅地域となっている。開発の波はさらに南下し県道高崎駒形線南の東善町においても住宅団地の造成が始まっている。このような住宅開発に伴い、幹線道路も整備され、南へ約700mには県道高崎駒形線が走り、東善町で県道藤岡大胡線と広瀬団地へつながる幹線道路に分岐している。さらに、南へ約1.5kmには北関東自動車道の建設が計画されている。このような開発や戦中、戦後の開墾により、この地域にあった数多くの古墳が未調査のまま平夷されてしまった。

2 歴史的環境

山王若宮遺跡周辺は県内でも有数の古墳分布地帯「広瀬古墳群」に位置する。「広瀬古墳群」は朝倉町を中心とする地域、広瀬町を中心とする地域、そして山王町を中心とする地域の三つに分けられる。昭和13年発行の「上毛古墳縦覧」によると昭和10年の古墳調査ではこの地域である旧勢多郡上川淵村には113基、旧佐波郡上陽村には41基の古墳が確認されている。しかし、戦中、戦後の開墾、そして、前述したように近年の住宅地造成により、多くの古墳が未調査のまま平夷された。そのため、今日、発掘調査によりその全



Fig. 2 山王若宮遺跡周辺図

容が明らかになっている古墳、ましてや完全な姿をとどめる古墳はごく少ない。本遺跡の山王地域には「上毛古墳綜覧」によると34基の古墳が存在していたが、現在では北西約300mに金冠塚古墳、文珠山古墳、阿弥陀山古墳が原形をとどめている程度である。

これらの古墳群の形成は前橋市内はもちろん群馬県内でも最も古い時期から始まる。

古墳時代前期では、八幡山古墳（No17：4世紀後半）と天神山古墳（No18：4世紀後半）が有名である。ともに県内においてもこの時期を代表する古墳である。八幡山古墳は全長約130mの前方後方墳であり、これだけの規模をもつ前方後方墳は全国的にみても数少ない。天神山古墳は全長約128mの県内最古の前方後円墳で三角縁四神四獸鏡をはじめ豊富な副葬品が出土した。これだけの大規模な古墳から当時、既にこの前橋台地東側に有力な首長勢力が支配圏を確立していたことがうかがえる。また、朝倉II号墳（No9：4世紀後半）は、石田川式系の壺形土器が墳頂部に配列されていたと思われ、八幡山古墳や天神山古墳と同時期と思われる。

古墳時代中期の5世紀代の古墳は少なく、明確なものがない。そんな中で、亀塚山古墳（No30：5世紀後～6世紀初）は県内でも数少ない帆立貝式古墳である。ほかに同時期と思われる前方後円墳である上陽17号墳（No39：5世紀後～6世紀初）がある。

6世紀の古墳時代後期から再び古墳の造営が活発化し、多くの古墳が造られている。天川二子山古墳（No2：6世紀末）、上両家二子山古墳（No26：7世紀初）、長山古墳（No9：7世紀前）のような大規模な前方後円墳が再び造られた。金冠塚古墳（No35：6世紀末～7世紀初）は、全長52mの前方後円墳で出土した金銅製の冠は県内でも例がない。他に上陽24号墳（No31：6世紀前半）や小旦那古墳（No8：6世紀前半）などがある。

7世紀の古墳時代後期から終末期にかけては、円墳の小型化が進んでくる。県内の古墳の八割前後は直径10m前後の小さな円墳であり、「上毛古墳綜覧」によると本古墳群においても半数以上は直径10～20m前後の小円墳であり点在している。そのため消滅している古墳も数多くある。そんな中で、山王大塚古墳（No34：7世紀初）のような40m径の円墳や大塚北古墳（No33：7世紀末）のような方墳も造られている。ほかに狐塚古墳（No43：7世紀）、上陽10号墳（No44：7世紀初）、朝倉1号墳（No11：7世紀初）などが確認されている。

古墳以外の遺跡については本遺跡から北西3kmに後闇（No45）、後闇II（No46）、後闇団地（No47）、坊山遺跡（No48）がある。坊山、後闇II遺跡からは古墳時代鬼高III期の土器を伴う住居址が、後闇団地遺跡からは古墳時代石田川式土器を伴う住居址が検出されている。古墳同様、未調査のまま平夷されたものが多く、本格的な発掘調査も数少ない。

- 1 山王若宮遺跡
 2 前橋二子山古墳
 3 朝倉天神山古墳
 4 朝倉魂古墳
 5 上川瀬18号墳
 6 上川瀬26号墳
 7 朝倉町円筒棺
 8 小旦那古墳
 9 朝倉2号墳
 10 長山古墳
 11 朝倉1号墳
 12 少林山古墳
 13 鶴巻塚古墳
 14 踏石古墳
 15 朝倉3号墳
 16 上川瀬54号墳
 17 八幡山古墳
 18 前橋天神山古墳
 19 上川瀬86号墳
 20 飯玉神社古墳
 21 大塚敷古墳
 22 上川瀬113号墳
 23 行入塚古墳
 24 上川瀬111号墳
 25 鶴巻山古墳
 26 上岡家二子山古墳
 27 包食塚古墳
 28 ポンセン山古墳
 29 オトウカ塚古墳
 30 亀塚山古墳
 31 上陽24号墳
 32 上陽27号墳
 33 大塚北古墳
 34 山王大塚古墳
 35 金冠塚古墳
 36 薬師山古墳
 37 律義寺東古墳
 38 上陽13号墳
 39 上陽17号墳
 40 文珠山古墳
 41 阿弥陀山古墳
 42 上陽12号墳
 43 狐塚古墳
 44 上陽10号墳
 45 後闇遺跡
 46 後闇Ⅱ遺跡
 47 後闇閉地遺跡
 48 坊山遺跡

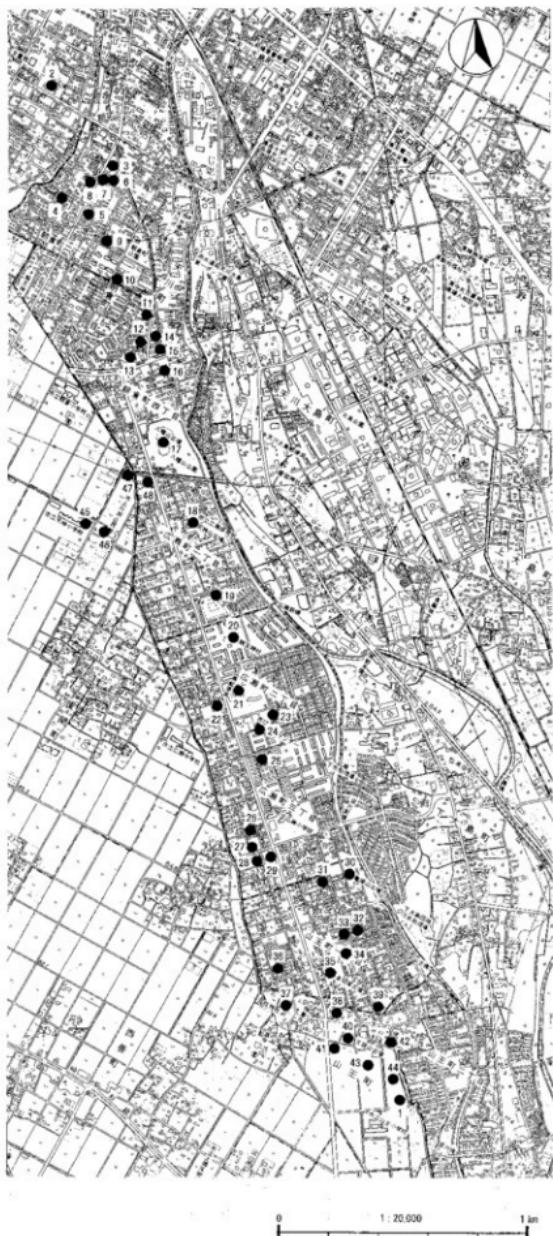


Fig. 3 周辺遺跡図

III 調査の経過

1 調査方針

委託された調査箇所は東西約42m、南北約23mの建物建設部分で面積は966m²である。グリッドについては、4mピッチで西から東へX1, X2, X3...と、北から南へY1, Y2, Y3...と番付し、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。

X2・Y6の公共座標は、第IX系 $X = +38726.68\text{m}$, $Y = -63332.07\text{m}$ 、緯度 $36^{\circ}21'30''$ 経度 $139^{\circ}07'41''$ である。

調査方法については、A区から表土掘削・遺構確認・杭打ち・遺構掘り下げ・遺構精査・測量全景写真の順序で行うこととした。

図面作成は、平板・簡易造り方測量を用い、住居址は1/20の縮尺で、古墳は1/40の縮尺で作成した。遺構の遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録をとりながら収納した。包含層の遺物はグリッド単位で収納したが、重要遺物については分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。また、プラン確認の段階で1/100の現況図を作成し、その後の調査に活用した。

2 調査経過

8月29日より重機(バックフォー0.7m³)を投入して調査区東部から表土掘削を開始した。現地表より6~70cm下からにぶい黄褐色のロームと黒色土の混土層が現れた。9月1日、調査区東部からジョレンかけによるプラン確認を行い本調査に入った。遺構面からは土器、埴輪の破片が多数出土し、調査区中央部から西部にかけて石が配列されていた。しかし、プランが重複しておりなかなか確定することができなかった。そこで、サブトレーンチを入れて遺構の有無を確認する調査方法をとった。その結果、調査区中央部南北トレーンチより円筒埴輪が2基出土し、M-4号墳を確定することができた。2週目に入ると、ぐずついた天気が続き調査区の水没が懸念されていたが、比較的水はけもよく、合間を見て作業を進めることができた。トレーンチの結果、M-1~4号墳のプランが確定できた。3週目に入り、M-1~4号墳の周堀の掘り下げ作業を開始し、本格的な古墳調査に入った。当初、古墳と関係があると思われた配列石は、現代に埋めたものであることが判明した。さらに、M-1号墳の周堀内から住居址が検出され、古墳以前に住居が存在していたことが明らかになった。これにより、調査は古墳調査終了後、住居址調査に入ることになった。その後、東壁、西壁際からM-5~7号墳が検出され、9月24日、ハイライダーによる古墳遺構面の写真撮影を終えて、古墳の調査が終了した。ハイライダーによる写真撮影終了後、古墳遺構面を掘り下げて、住居址調査に入る。プラン確認の結果、14軒の住居址が検出された。調査終了日が決まっていたため、急ピッチで作業を進め、9月30日住居址調査を終了した。翌日ハイライダーによる住居址遺構面の写真撮影をもって、現地調査を終了した。

その後、10月6日から17日まで遺物洗浄を、翌年1月6日より整理作業を行い、3月25日、すべての作業を完成させる運びとなった。

N 層序

本遺跡が位置する前橋台地は火山泥流堆積物とそれを覆う火山灰質シルト粘土から成り立つ洪積台地である。台地東側は旧利根川流域の河川敷で広瀬川低地帯と呼ばれている。前橋台地と広瀬川低地帯の境は直線的な崖となっており、本遺跡から東へ30mほどの所が崖となっている。本遺跡の基本層序はFig. 4 のとおりである。

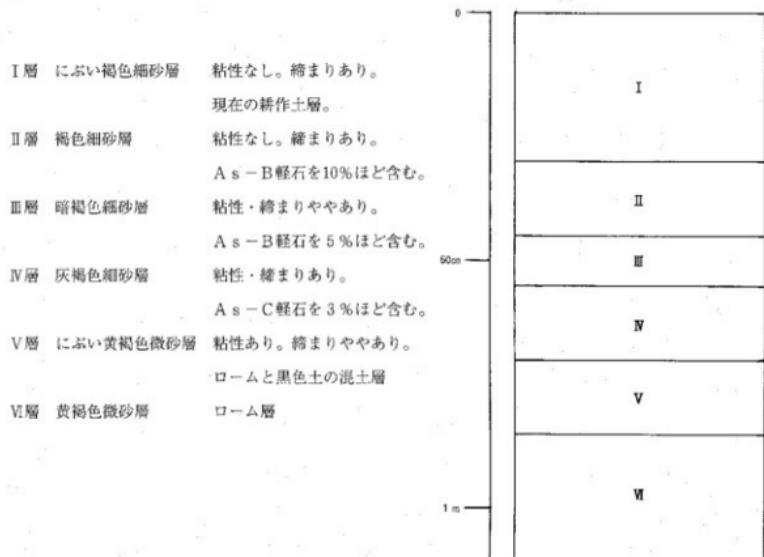


Fig. 4 基本層序

V 遺構と遺物

1 住居址

H-1号住居址 (Fig. 6, PL. 1)

- ◎位 置 X 1~3、Y 6~7グリッド ◎面積 34.81m² ◎方位 N-90°-W
- ◎形 状 長軸6.21m、短軸5.72mの隅丸方形を呈する。壁高は平均26cmを測る。周溝は幅15~20cm、深さ3~10cmを測り全周する。
- ◎床 面 張り床と思われる踏み固められた堅緻な面は検出されず、炉址と思われる焼土の検出により、床面と判断した。全体にやや凹凸がある。
- ◎ピット 6基検出された。うち方形に配されたP₁~P₄が柱穴と思われる。
 - P₁・長径40cm×短径39cm、深さ45cm P₂・長径53cm×短径47cm、深さ49cm
 - P₃・長径54cm×短径49cm、深さ38cm P₄・長径51cm×短径42cm、深さ45cm東西間 (P₁-P₄, P₂-P₃) は3.02m、南北間 (P₁-P₂, P₄-P₃) は3.1mである。
- ◎炉 址 住居址内中央部に径70~80cm、深さ3~5cmの楕円形範囲で焼土を検出。明隙ではないが、焼土の位置、範囲から炉址と思われる。南西部からは焼土の分布が認められた。
- ◎貯蔵穴 P₅・南中央より検出。やや隅丸方形で、73cm×61cm、深さ40cmを測る。
- ◎遺 物 遺物総数は土師器482点、石田川式土器227点、うち2点を図示した。
- ◎重 複 北壁から東壁にかけて、M-1周堀と重複するが、本遺構の方が先行する。
- ◎備 考 出土遺物の特徴から石田川式土器を伴う4世紀後半(初)と思われる。

H-2号住居址 (Fig. 7, PL. 1)

- ◎位 置 X 3~4、Y 5~6グリッド ◎面積 26.29m² ◎方位 N-61°-E
- ◎形 状 長軸5.3m、短軸5.0mの隅丸方形を呈する。壁高は平均38.5cmを測る。周溝は幅18cm、深さ4cmを測り全周する。
- ◎床 面 張り床と思われる踏み固められた堅緻な面は検出されず、炉址と思われる焼土と溝の検出により、床面と判断した。全体にやや凹凸がある。南壁付近に炭化物が散在して検出された。東壁から2条、南壁から1条、西壁から2条、それぞれ中央部に向かう間仕切り溝が計5条検出された。
- ◎ピット 9基検出された。うち方形に配されたP₁~P₄が柱穴と思われる。
 - P₁・長径31cm×短径23cm、深さ28cm P₂・長径26cm×短径23cm、深さ30cm
 - P₃・長径33cm×短径29cm、深さ34cm P₄・長径30cm×短径28cm、深さ37cm東西間 (P₁-P₄, P₂-P₃) は2.7m、南北間 (P₁-P₂, P₄-P₃) は2.7mである。
- ◎炉 址 住居址内中央部やや北に径50cmの円形範囲で焼土を検出。明隙ではないが、焼土の位置、範囲から炉址と思われる。
- ◎貯蔵穴 P₅・南東より検出。やや隅丸方形で、44cm×40cm、深さ30cmを測る。

- 遺物 遺物総数は土師器607点、石田川式土器224点、うち5点を図示した。
- 重複 南西隅がM-1周堀と、東部がH-13と重複。
重複関係はH-13→H-2→M-1の順。
- 備考 出土遺物の特徴から石田川式土器を伴う4世紀後半（中）と思われる。

H-3号住居址 (Fig. 8, PL. 1)

- 位置 X 6~8、Y 4~6グリッド ○面積 27.98m² ○方位 N-14°-W
- 形状 長軸5.4m、短軸5.3mの隅丸方形を呈する。壁高は平均32cmを測る。周溝は幅10~15cm、深さ5~8cmを測り全周する。
- 床面 張り床と思われる堅密な面は検出されず、炉址と思われる焼土の検出により、床面と判断した。全体に平坦である。
- ピット 4基検出された。方形に配されており、柱穴と思われる。
 P₁・長径30cm×短径30cm、深さ29cm P₂・長径33cm×短径28cm、深さ32cm
 P₃・長径36cm×短径34cm、深さ34cm P₄・長径44cm×短径34cm、深さ38cm
 東西のP₁-P₂間は3.2m、P₂-P₃間は3.1m、南北のP₁-P₄間は2.7m、P₃-P₄間は2.7mである。
- 炉址 住居内中央部やや北に径35~40cm、深さ6cmの円形範囲で焼土を検出。明隙ではないが、焼土の位置、範囲から炉址と思われる。
- 貯蔵穴 P5・南西部に70cm方形、深さ45.5cmを測る。
- 遺物 遺物総数は土師器164点、石田川式土器108点、うち2点を図示した。
- 重複 北西隅でD-1、2、3と、東壁でM-4周堀と重複。
重複関係はH-3→M-4の順。D-1、2、3についてはH-3より新しいがM-4との前後関係は不明。
- 備考 出土遺物の特徴から石田川式土器を伴う4世紀後半（初）と思われる。

H-4号住居址 (Fig. 9, PL. 1)

- 位置 X 6~7、Y 6~7グリッド ○面積 21.9m² ○方位 N-87°-E
- 形状 住居址内中央部は重複に削られている。長軸5.5m、短軸4.2mの隅丸方形を呈すると思われる。壁高は平均30cmを測る。
- 床面 張り床と思われる堅い面は検出されず、柱穴と思われるピットの検出により、床面と判断した。全体に平坦である。
- ピット 4基検出された。方形に配されており、柱穴と思われる。
 P₁・長径24cm×短径22cm、深さ47cm P₂・長径30cm×短径27cm、深さ43cm
 P₃・長径30cm×短径28cm、深さ31cm P₄・長径30cm×短径26cm、深さ40cm
 東西のP₁-P₄間は2.6m、P₂-P₃間は2.6m、南北のP₁-P₂間は1.9m、P₄-P₃間は1.8mである。
 P₃、P₄はM-2周堀によって上部が削平されている。

- ◎炉 址 炉址・焼土は確認できなかった。
- ◎遺 物 遺物総数は土師器170点、石田川式土器130点、うち6点を図示した。
- ◎重 複 北壁から南東隅にかけてM-2周堀と重複するが、本遺構の方が先行する。
- ◎備 考 出土遺物の特徴から石田川式土器を伴う4世紀後半（初）と思われる。

H-5号住居址 (Fig. 9, PL. 2)

- ◎位 置 X 5~7、Y 2~3グリッド ◎面積 (21.52m²) ◎方位 N-53°-E
- ◎形 状 住居址北部が調査区外へ伸びるため、確認できたのは長軸5.4m、短軸4.8mで隅丸方形を呈すると思われる。後世の耕作による削平を受け遺構の残り具合は悪く、壁は数cmしか残存していない。西壁のみ12cmを測ることができた。
- ◎床 面 張り床と思われる堅緻な面は検出されず、柱穴と思われるピットの検出により、床面と判断した。全体に平坦である。
- ◎ピット 5基検出された。うちP₁~P₄が方形に配されており、柱穴と思われる。
P₁・長径55cm×短径47cm、深さ39cm P₂・長径37cm×短径28cm、深さ15cm
P₃・長径31cm×短径30cm、深さ43cm (P₄は上部が削平されている。)
東西のP₁~P₄間は2.6m、南北のP₁~P₄間は2.5mである。
- ◎炉 址 炉址・焼土は確認されなかった。
- ◎遺 物 遺物総数は土師器96点、石田川式土器69点、うち1点を図示した。
- ◎重 複 南西隅がM-3周堀と重複。本遺構の方が先行する。
- ◎備 考 出土遺物の特徴から石田川式土器を伴う4世紀後半（中）と思われる。

H-6号住居址 (Fig. 6, PL. 2)

- ◎位 置 X 9~10、Y 2~3グリッド ◎面積 11.33m² ◎方位 N-69°-W
- ◎形 状 長軸3.7m、短軸3.2mの隅丸方形を呈する。後世の耕作による削平を受け遺構の残り具合は悪く、壁は数cmしか残存していない。
- ◎床 面 張り床と思われる堅緻な面は検出されず、炉址と思われる焼土、柱穴と思われるピットの検出により、床面と判断した。全体に平坦である。
- ◎ピット 4基検出された。うちP₁~P₄が方形に配されており、柱穴と思われる。
P₁・長径26cm×短径24cm、深さ24cm P₂・長径26cm×短径23cm、深さ17cm
P₃・長径34cm×短径26cm、深さ26cm
東西のP₁~P₄間は2.1m、南北のP₁~P₄間は1.6mである。
- ◎炉 址 住居址内中央部に径30cm、深さ4cmの円形範囲で焼土を検出。明瞭ではないが、焼土の位置、範囲から炉址と思われる。
- ◎遺 物 遺物総数は土師器124点、石田川式土器86点である。
- ◎備 考 出土遺物から4世紀後半（末）と思われる。

H-7号住居址 (Fig.10, PL.2)

- ◎位 置 X 9~10、Y 5グリッド ◎面積 (9.31m²) ◎方位 (N-58°-E)
- ◎形 状 重複により確認できたのは長軸3.65m、短軸(2.6)mで隅丸方形を呈すると思われる。後世の耕作による削平を受け遺構の残り具合は悪く、壁は数cmしか残存していない。周溝は幅10~13cm、深さ5cmを測る。
- ◎床 面 張り床と思われる堅緻な面は検出されず、炉址と思われる焼土の検出により、床面と判断した。
- ◎ピット 検出されなかった。
- ◎炉 址 住居址中央部に30×70cmの不定形範囲で焼土を検出。明隙ではないが、焼土の位置、範囲から炉址と思われる。
- ◎遺 物 遺物総数は土師器19点、石田川式土器22点である。
- ◎重 複 北側半分がH-8と重複。H-8の方が先行する。
- ◎備 考 出土遺物から4世紀後半（末）と思われる。

H-8号住居址 (Fig.10, PL.2)

- ◎位 置 X 8~10、Y 3~5グリッド ◎面積 (32.65m²) ◎方位 N-61°-E
- ◎形 状 重複により確認できたのは、長軸6.2m、短軸5.5mで隅丸方形を呈すると思われる。重複や後世の耕作による削平を受け遺構の残り具合は悪い。周溝は東壁中央から南、西壁中央にかけて幅10cm、深さ7cmを測る。
- ◎床 面 張り床と思われる堅緻な面は検出されず、柱穴と思われるピットの検出により、床面と判断した。
- ◎ピット 10基検出され、うちP₁~P₄が方形に配されており、柱穴と思われる。
P₁・長径29cm×短径23cm、深さ7cm P₂・長径33cm×短径20cm、深さ30cm
P₃・長径39cm×短径23cm、深さ44cm P₄・長径36cm×短径27cm、深さ8cm
東西のP₁~P₄間は3.5m、P₂~P₃間は3.7m、南北のP₁~P₃間は3.6m、
P₄~P₃間は3.3mである。
- ◎炉 址 炉址・焼土は検出されなかった。
- ◎遺 物 遺物総数は土師器118点、石田川式土器62点である。
- ◎重 複 北側がM-4周堀と、南壁がH-7と、西壁がH-11と重複。
重複関係はH-8→H-7→M-4の順。
- ◎備 考 出土遺物から4世紀後半（中）と思われる。

H-9号住居址 (Fig.7, PL.2)

- ◎位 置 X12、Y 4~5グリッド ◎面積 (0.63m²) ◎方位 確認できず。
- ◎形 状 本遺構のほとんどは調査区外に伸び、本住居址の北西角しか確認できなかった。
確認できた西壁は1.28m、北壁は0.48m、壁高は西壁で10cmを測る。
- ◎床 面 やや堅いしまった面を床面と判断した。

- ◎ピット 検出されなかった。
- ◎炉 址 炉址・焼土は検出されなかった。
- ◎遺 物 遺物総数は土師器54点、石田川式土器22点である。
- ◎備 考 全容が確認できなかったため、時期は不明。

H-10号住居址 (Fig. 7, P L. 2)

- ◎位 置 X 8 ~ 9、Y 1 ~ 2 グリッド ◎面積 (12.2m²) ◎方位 N-64°-W
- ◎形 状 本遺構の北側半分が調査区外に伸び、重複するため、確認できたのは、長軸(4.0)m、短軸(3.0)mで隅丸方形を呈すると思われる。後世の耕作による削平を受け遺構の残り具合は悪く、壁は数cmしか残っていないが、平均5cmを測る。
- ◎床 面 張り床と思われる堅緻な面は検出されず、炉址と思われる焼土の検出により、床面と判断した。全体に平坦である。
- ◎ピット 1基検出されたが、柱穴になるかは判断できない。
- ◎炉 址 住居址内中央部に80~120cmの不定形範囲で焼土を検出。明隙ではないが、焼土の位置、範囲から炉址と思われる。
- ◎遺 物 遺物総数は土師器68点、石田川式土器87点である。
- ◎備 考 出土遺物から4世紀後半（末）と思われる。

H-11号住居址 (Fig.10, P L. 2)

- ◎位 置 X 8 ~ 9、Y 4 ~ 5 グリッド ◎面積 (6.36m²) ◎方位 N-50°-E
- ◎形 状 重複により確認できたのは、長軸(2.00)m、短軸(1.4)mで隅丸方形を呈すると思われる。後世の耕作による削平を受け遺構の残り具合は悪く、壁は数cmしか残存していない。周溝は南壁から西壁にかけて幅15cm、深さ2cmを測る。
- ◎床 面 張り床と思われる堅緻な面は検出されず、炉址と思われる焼土の検出により、床面と判断した。
- ◎ピット 検出されなかった。
- ◎炉 址 住居址内に30~60cmの不定形の範囲で焼土を検出。明隙ではないが、焼土の位置、範囲から炉址と思われる。
- ◎遺 物 遺物総数は石田川式土器2点である。
- ◎重 複 東部がH-7、8と、北部がM-4周堀と重複。
重複関係は、H-11→H-8→H-7→M-4の順。
- ◎備 考 出土遺物から4世紀後半（中）と思われる。

H-12号住居址 (Fig.10, P L. 2)

- ◎位 置 X 9 ~ 10、Y 5 ~ 6 グリッド
- ◎形 状 住居址プランが確認できなかったため、面積、方位、形状は不明。
方形状に配列された柱穴と思われるピット、そして、方形範囲内から炉址と思

われる焼土の検出により、住居址と判断した。

- ◎ピット 方形に配されたP₁～P₄が柱穴と思われる。

P₁・長径27cm×短径25cm、深さ38cm P₂・長径40cm×短径37cm、深さ58cm

P₃・長径37cm×短径31cm、深さ25cm P₄・長径53cm×短径40cm、深さ38cm

東西のP₁～P₄間は3.2m、P₂～P₃間は3.6m、南北のP₁～P₂間は3.6m、

P₄～P₃間は4.6mである。

- ◎炉 址 方形範囲内に径30cmの範囲で焼土を検出。明隙ではないが、焼土の位置、範囲から炉址と思われる。

- ◎遺 物 遺物総数は土師器482点、石田川式土器227点である。

- ◎重 複 H-7, 14と重複。重複関係は不明。

- ◎備 考 全容が確認できないため、時期は不明。

H-13号住居址 (Fig.11, PL.2)

- ◎位 置 X 3～5、Y 5～6 グリッド ◎面積 (28.57m²) ◎方位 N-89°-W

- ◎形 状 重複により確認できたのは長軸6.0m、短軸4.9mで隅丸方形を呈すると思われる。壁高は平均33cmを測る。

- ◎床 面 張り床と思われる堅緻な床面は検出されず、柱穴と思われるピットの検出により、床面と判断した。全体にやや凸凹がある。

- ◎ピット 5基検出された。うちP₁～P₃が方形に配されており、柱穴と思われる。

P₁・長径30cm×短径30cm、深さ20cm P₂・長径36cm×短径34cm、深さ19cm

P₃・長径26cm×短径21cm、深さ27cm

東西間 (P₁～P₃) は2.5m、南北間 (P₂～P₃) は2.6mである。

- ◎炉 址 炉址・焼土は検出されなかった。

- ◎遺 物 遺物総数は土師器473点、石田川式土器167点、うち4点を図示した。

- ◎重 複 中央部から南西隅にかけてH-2と重複。本遺構の方が先行する。

- ◎備 考 出土遺物の特徴から石田川式土器を伴う4世紀後半(初)と思われる。

H-14号住居址 (Fig.10, PL.2)

- ◎位 置 X 9～10、Y 5～6 グリッド

- ◎形 状 住居址プランが確認できないため、面積、方位、形状は不明。

方形状に配列された柱穴と思われるピット、そして、方形範囲内から炉址と思われる焼土の検出により、住居址と判断した。

- ◎ピット 方形に配されたP₁～P₄が柱穴と思われる。

P₁・長径32cm×短径29cm、深さ39cm P₂・長径47cm×短径41cm、深さ35cm

P₃・長径31cm×短径37cm、深さ26cm P₄・長径50cm×短径39cm、深さ39cm

東西のP₁～P₄間は4.2m、P₂～P₃間は4.1m、南北のP₁～P₂間は2.8m、

P₄～P₃間は2.6mである。

- ◎炉 址 方形範囲内に径20cmの不定形範囲で焼土を検出。明隙ではないが、焼土の位置、範囲から炉址と思われる。
- ◎遺 物 遺物総数は土師器482点、石田川式土器227点である。
- ◎重 複 H-7, 12と重複。重複関係は不明。
- ◎備 考 全容が確認できないため、時期は不明。

2 古墳

M-1号墳 (Fig.12, P L. 3)

調査区北西部、X 1~5、Y 0~2グリッドに位置し、古墳北部は調査区外に伸びる。南にM-2号墳、東にM-3号墳と接する。後世の耕作による削平を受け墳丘は平坦になっているが、周堀の形状より推定して径15~17mの円墳と思われる。周堀は北半分が調査区外に伸びるため不明であるが、東で幅1.4m、深さ32.5cm、南で幅1.7m、深さ19cm、西で幅1.6m、深さ27cmを測る。主体部は削平を受け壊されており、確認できなかった。出土遺物はなかった。

M-2号墳 (Fig.13, P L. 3)

調査区南西部、X 4~7、Y 5~9グリッドに位置し、古墳南部は調査区外に伸びる。北にM-1号墳と接する。後世の耕作による削平を受け墳丘は平坦になっているが、周堀の形状より推定して径15~17mの円墳と思われる。周堀は南半分が調査区外に伸びるため不明であるが、東で幅2.4m、深さ34cm、北で幅2.7m、深さ34.5cm、西で幅2.4m、深さ31cmを測る。主体部は削平を受け壊されており、確認できなかった。出土遺物はなかった。

M-3号墳 (Fig.14, P L. 3)

調査区中央北部、X 5~7、Y 2~4グリッドに位置し、古墳北部は調査区外に伸びる。西にM-1号墳と接する。後世の耕作による削平を受け墳丘は平坦になっているが、周堀の形状より推定して約13mの円墳と思われる。周堀は北半分が調査区外に伸びるため不明であるが、東で幅2.3m、深さ49.5cm、南で幅2.0m、深さ39cm、西で幅1.2m、深さ35cmを測る。主体部は削平を受け壊されており、確認できなかった。出土遺物はなかった。

M-4号墳 (Fig.15, P L. 3)

調査区南東部、X 7~10、Y 4~6グリッドに位置し、古墳南部は調査区外に伸びる。東にM-6号墳と接する。後世の耕作による削平を受け墳丘は平坦になっているが、周堀の形状より推定して約径15mの円墳と思われる。周堀は南半分が調査区外に伸びるため不明であるが、東で幅1.8m、深さ32cm、北で幅1.5m、深さ32.5cm、西で幅1.7m、深さ40cmを測る。主体部は削平を受け壊されており、確認できなかった。出土遺物は埴輪片が多数出土し、うち円筒埴輪11点、形象埴輪1点、器台1点が図示できた。

M-5号墳 (Fig.14, P L. 3)

調査区北東部、X 9~10、Y 0~2 グリッドに位置する。調査区内に確認できたのは、周堀の一部のみでほとんどは調査区外に伸びている。そのため、形状等は不明であるが、周堀の形状より円墳と思われる。出土遺物はなかった。

M-6号墳 (Fig.15, P L. 3)

調査区南西部、X 10~11、Y 4~5 グリッドに位置する。調査区内に確認できたのは、古墳北西部の一部のみでほとんどは調査区外に伸びている。西にM-4号墳と接する。後世の耕作による削平を受け墳丘は消滅しており平坦になっているが、周堀の形状より推定して約 9 m の円墳と思われる。確認できた周堀は幅1.6m、深さ25cmを測る。主体部は調査区外のため確認できなかった。出土遺物は円筒埴輪 1 点が図示できた。

M-7号墳 (Fig.14, P L. 4)

調査区南東部、X 2~3、Y 8~10 グリッドに位置する。調査区内に確認できたのは、古墳東部の一部のみでほとんどは調査区外に伸びている。後世の耕作による削平を受け墳丘は平坦になっているが、周堀の形状より推定して約径12m の円墳と思われる。確認できた周堀は東側の一部のみで幅1.6m、深さ26cmを測る。主体部は削平を受け壊されており、確認できなかった。出土遺物はなかった。

3 グリッド出土遺物

本遺跡遺構面からは小破片を含め、須恵器 4 点、土師器5,545点、埴輪2,171点、石田川式土器3,011点が出土した。図示できた遺物は 3 点である。

VI ま と め

今回の発掘調査では限られた調査範囲でありながら、古墳7基、古墳時代の住居址14軒と大きな成果があった。先述したように本遺跡の位置する旧利根川河川敷西岸の地域は県内でも有数の古墳群である。そして、多くの古墳が発掘調査されずに平夷されてしまった状況の中、今回、発掘調査ができたことで当地域の貴重な資料を得ることができた。

以下、今回の発掘調査で明らかになったことを、古墳、住居址ごとにまとめてみたい。

◎住居址

本発掘調査区域からは合計14軒の竪穴式住居跡を確認することができた。しかし、多くの住居址は後世の耕作時や古墳構築時に住居址上部が平夷されてしまっている。特に12、14号住居址は床面まで平夷されてしまっており、柱穴と思われるピットとわずかに残っていた焼土跡から住居址と判断せざるを得ない状況であった。

構築時期についてはいずれの住居址も石田川式土器を伴っていることから古墳時代前期の4世紀後半を中心とする時期と考えられる。そして、その時期の中で出土遺物の特徴や住居址の方向から3つの時期に分類できる。記述の便宜上1、2、3グループとする。

まず、1グループは1、3、4、13号住居址がある。これらの住居址は軸が真北に近く、調査区中央から西に適当な間隔をもって配置されている。形は1辺が5~6mの方形である。そして、これらの住居址から出土した石田川式土器の中にはかなり外傾のS字口縁甕の破片が共通している。なかでも、13号住居址から出土した台付甕（No.5）は胴上半部と口縁内面に横のハケ日をもち、同様の破片が1号住居址からも出土している。このグループは4世紀後半の中でも古い時期にあたると思われる。

2グループは2、5、8号住居址である。これらの住居址の軸は真北から西へ29°~37°傾いている。1辺が5m前後で1グループに比べるとやや小さくなっていると思われる。このグループは調査区中央よりに位置し、1グループより東よりに配置されている。このグループの住居址からもS字口縁甕の破片が出土したが、1グループほど外傾はきつくないため、1グループより新しい時期と想定される。このなかで、2号住居址には間仕切り溝があり、壁から約1m幅で板がめぐらされ中央の炉址部分が土間的空間になっていたと考えられる。

3グループは6、7、10号住居址である。これらの住居址の軸は北正方位から西へ26°~69°とばらつきがみられる。1辺が4m前後で2グループよりもさらに小さくなっていると思われる。このグループは調査区東よりに位置する。このグループの住居址からもS字口縁部の破片が出土したが、直立に近く、1、2グループよりさらに新しい時期と想定される。

なお、11号住居址は出土遺物がないが、軸の方向、重複の関係から3グループの7号住居址より前と想定できる。9、12、14号住居址については全容が分からぬいため、不明である。

本遺跡の住居址は4世紀後半から5世紀にかけて西から東へ、つまり、旧利根川に近づいて集落を移動していたと想定される。まず、この地が生活するうえで水源となる旧利根川に近いこと、微高地であったことで集落が形成されたのではないだろうか。そして、最初の集落1グループが一番西の位置にあったことは、この集落が水源と耕作地の中間に形成された背景も考えられる。そうであるならば、本遺跡の西側には耕作地の存在が想定される。そして、徐々に水源に近い東側へ住居を移動していったのではないだろうか。

次に出土遺物についてであるが、多くは石田川式土器である。しかし、2号住居址出土の南関東系と思われる頸部に粘土ひもを巻いた土器片、5号住居址出土の東海系と思われる単口縁の土器片、グリッド出土の北陸系と思われる三角形の透かし孔を有する器台なども出土しバラエティに富んでいる。このことから本遺跡では各地の系統の文化が入り込みそれを在地のものと融合させていった過程を読み取ることができる。

最後にこの住居址と周辺遺跡との古墳群の関係について考えてみたい。本遺跡の4世紀後半の住居址は周辺では後閑田地遺跡（Fig. 3-47）で確認されており、S字口縁台付壺が出土している。おそらく、同時期の集落と考えられる。また、同時に構築されたと想定される古墳は八幡山古墳、天神山古墳、朝倉Ⅱ号墳である。これらの古墳は当地域でも最も古い時期に位置し、天神山古墳、朝倉Ⅱ号墳からは墳頂部に配列したと想定される石田川式の壺形土器が出土している。これらの石田川式土器よりも時期は新しいが大きな隔たりはないと思われる。よって、本遺跡の住居址はこれらの古墳に埋葬された当地域の権力者の生産基盤としての機能を果たしていたことは疑いない。

◎山王若宮遺跡の古墳群

本調査においては7基の小円墳を確認することができた。しかし、遺構面が現地表から浅いため後世の開発による破壊が著しく、いずれも墳丘部、主体部は平夷され周囲だけの確認にとどまった。また、調査区が限られていたため、周囲の一部だけしか確認できなかつた。そのような状況の中から得られた少ない資料をもとにこの古墳群についてまとめてみたい。

まず、古墳の規模であるが、最大のものは1、2号墳の推定径15~17m、他は推定径9~13mとすべて小規模墳の範囲に分類される。「上毛古墳総覧」に本遺跡の古墳群は記載されていないが、同規模の径40~60尺の小円墳は広瀬から山王にかけての古墳群においては最も多い古墳である。配置は4号墳と6号墳のように周囲が接するものもあるが、全体としては適当な間隔をもって配置され、当地域が墓域として位置づけられていたことが考えられる。

次に出土遺物をみてみる。埴輪が出土した古墳は4、6号墳の2基だけであり、6号墳からは円筒埴輪1点、4号墳からは円筒埴輪11点出土した。円筒埴輪は二条突帯の小形で突帯断面が三角形に形骸化し、つくりも雑なことからすると、終末期、7世紀前後の時期のものと考えられる。4号墳からは形にはならなかったが形象埴輪の基部のみ1基と腕や耳、口など形象埴輪の部分的な破片が出土しており、これらの破片から巫女形のものと思

われる。他の古墳は埴輪の存在を想定させる遺物は出土しなかったため、埴輪の伴わない古墳と考えられる。また、M-1, 2, 3号墳周辺からは角閃石安山岩の石群が多数検出された。その量からみてこれらの石は本遺跡内の古墳群に使用された可能性が強い。

古墳群の形成時期について考えてみる。人物埴輪を伴う4号墳、円筒埴輪を伴う6号墳は調査区東に位置しており、本古墳群が形成される順はこれら古墳から埴輪を伴わない1, 2, 3, 5, 7号墳へと西に向かって拡大していったと想定される。4号墳、6号墳に関しては円筒埴輪の形状やこれらの古墳の周辺から出土した土師器模倣窓の形状からその始期は6世紀後半の末葉を中心とした時期に位置づけられよう。そのほかの古墳については特定はできないが、古墳の被葬者階層の3~4世代を考えれば7世紀中葉ころまでの期間、継続してつくられた古墳群であったとみられる。

最後に本遺跡が位置する旧利根川河川敷西岸の古墳群からの視点でみてみると。この古墳群には全長100m級の天川二子山古墳を頂点に不二山、長山、金冠塚古墳など50m級の前方後円墳が5kmほどに帶状に分布し、これらすべてが角閃石安山岩を使用した横穴式石室を有するものであろうと推定される。その時期は供給源である榛名山二ッ岳の噴火（6世紀中ごろ）以降であり、前方後円墳に関しては6世紀第4四半期を中心としたものである。本遺跡の古墳群においても角閃石安山岩を使用していたと想定され、大きな隔たりはない。しかし、加工が雑であることから本遺跡の古墳はこれらの古墳と同じ時期でも末期に位置づけられると考えられる。また、本遺跡に最も近いところに位置する金冠塚古墳は全長56mの2段築成の墳丘で主体部は南西方向に開口する角閃石安山岩使用の両袖型横穴式石室を有している。出土遺物には金銅製冠をはじめ、金銅製大刀、鉄地金銅製張馬具などがあり、小地域の首長墳の様相を見せている。本遺跡の古墳群の被葬者は位置関係や古墳の規模から金冠塚古墳の被葬者の傘下にあったものと推定される。

以上のように、墳丘の規模が小さいこと、円筒埴輪が終末期であること、埴輪を伴わない古墳が存在すること、古墳の石材としての角閃石安山岩の加工技術が粗雑であること、などから本古墳群は6世紀後半から7世紀中葉までの間に形成された完成度の低い古墳群であったと結論づけられよう。

参考文献

- 1938 『上毛古墳綜覧』 群馬県
- 1971 尾崎喜左雄「豪族の支配と古墳の構造」『前橋市史』第1巻
- 1981 『群馬県史』 資料編3 原始古代3
- 1990 「古墳時代の群馬」『群馬県史』 通史編1 原始古代1
- 1981 「金冠塚（山王二子山）古墳調査概報」 前橋市教育委員会
「後閑団地遺跡」 前橋市教育委員会
- 1970 『前橋市文化財調査報告書』第1集
- 「広瀬団地古墳群発掘調査報告」 前橋市教育委員会

Tab.1 遺物観察表

番号	出土位置	器 形	大きさ	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存 口徑 器高	成・整 形 方 法		備 考	Fig
					口 線	脚 部		
1	H-1	高环	12.0	-	①細粒②良好③にい程④1/3	ゆるやかな内溝。横削で。底部欠損。	脚部欠損。脚部に透かし孔を有す。	16
2	H-1	高环	20.8	-	①細粒②良好③赤④断続的④1/4	ゆるやかな外縁。横削で。底部欠損。	脚部欠損。	16
3	H-2	高环	-	-	①細粒②良好③明褐④1/2	外縁。口縁部欠損。脚部欠損。	脚部欠損。	16
4	H-2	増	8.6	-	①細粒②良好③赤④1/4	直立よりやや外縁。脚部底部欠損。	脚部に最大径。	16
5	H-2	瓶	15.0	8.6	①細粒②良好③にい程④ほぼ完形	やや内溝みの外縁。横削で。底部欠損。	単孔。内面黒色処理。	16
6	H-2	増	10.3	9.6	①細粒②良好③明赤④ほぼ完形	外縁。横削で。底部欠損。	脚部欠損。上1/3に脚部。口縁部に最大径。	16
7	H-2	壺	14.8	-	①細粒②良好③赤④1/2	外反。横削で。底部欠損。	欠損。脚部に指圧痕。	16
8	H-3	瓶	19.8	7.7	①細粒②良好③にい程④1/4	折り返し口縁。横削で。板方向に施削り。内面底部欠損。	多孔。鉢形を呈する。	16
9	H-3	手づくね	7.6	3.4	①細粒②良好③にい程④完形	外縁。横削で。無。	施削り。	16
10	H-4	高环	22.3	12.8	①細粒②良好③赤④1/3	ゆるやかな外縁。横削で。底部欠損。	脚部に透かし孔を有す。	16
11	H-4	小型壺	11.1	9.1	①細粒②良好③にい程④1/5	外縁。脚部前方ハケ目後端で。	底部欠損。	17
12	H-4	台付壺	10.2	-	①細粒②良好③にい程④底部2/3	直立ぎみの外縁。横削で。脚部不定方向ハケ目。	底部欠損。	17
13	H-4	壺	15.4	-	①細粒②良好③秋赤④1/3	外反。口縁～脚部底辺ハケ目。颈部～脚部底辺ハケ目。底部欠損。	脚部欠損。	17
14	H-4	高环	24.3	-	①細粒②良好③赤④脚部5/6	外縁。横削で。底部は浅い。	脚部欠損。	17
15	H-4	増	11.1	16.5	①細粒②良好③赤④完形	直立よりやや外縁。横削で。更崩き。	底部中央に最大径。	17
16	H-5	増	11.7	7.5	①細粒②良好③赤④ほぼ完形	外縁。口縁部～脚部底辺方向ハケ目後端で。	施削り後削で調整。1/2部分に脚部。口縁部に最大径。	17
17	H-18	増	-	-	①細粒②良好③赤④底部1/4	口縫部欠損。底部から脚部にかけて底部欠損。	底部内面にハケ目あり。	18
18	H-18	器台	17.6	-	①細粒②良好③赤④5/5	外反。横削で。脚部底辺立し脚部に突起あり。	脚部欠損。	18
19	H-18	台付壺	13.1	-	①細粒②良好③にい程④脚部5/6	外縁。横削で。脚部底辺ハケ目。S字口縁。	底部内面に横ハケ目。脚部欠損。	18
20	H-18	壺	13.0	-	①細粒②良好③赤④2/3	外反。横削で。底部欠損。	欠損。	17
21	M-4	器台	8.9	-	①細粒②良好③赤④3/4	内溝ぎみの外縁。横削で。底部欠損。	脚部底部欠損。受け部は浅く、脚部に透かし孔を有す。	18
22	X9Y9	壺	-	-	①細粒②良好③赤④底部1/3	脚部～口縫部欠損。胸部～底部底部欠損。	底部欠損。	18
23	X9Y3	器台	-	-	①中粒②良好③赤④1/3	ほぼ直立。横削で。底部欠損。	脚部欠損。	18
24	X10Y1	壺	16.1	-	①細粒②良好③赤④1/5	外反。横削で。底部欠損。	脚部に△の透かし孔を有する。	18
25	試掘	土師环	13.3	4.7	①細粒②良好③赤④1/2	外縁。横削で。更崩り後削で。	外縁。	18
26	試掘	土師环	10.0	4.9	①細粒②良好③赤④1/4	外反。横削で。更崩り後削で。	内面にすり付着。	18
27	試掘	土師环	13.9	4.4	①細粒②良好③赤④1/3	外縁。横削で。底部欠損。	更崩り後削で調整。	18

注) 表の記載は以下の基準で行った。

①胎土は、細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm以下)、粗粒(2.0mm以上)とした。

②焼成は、極良、良好、不良の3段階。

③色調は上器外面で観察し、色名は新版標準土色帖(小山・竹原1976)によった。

④大きさの単位はcmであり、現存値を記載した。

Tab. 2 塗輪観察表

番号	位置	器形	大きさ 口径 器高 底径	厚 口縁 底部 基部	透孔 帯	突 2条①突帯分類 1条②突帯厚 ③基部～長 さ	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存 ⑤中粒 ⑥良好 ⑦赤褐色 ⑧1/2	ハケ目 本/2cm	成 形 調 整	①基部 ②外面 ③内面	Fig.
1	M-4	形象埴輪	— — 14.3	— 1.0 1.6				7		①石回り ②基部：縫ハケ ③横なで	19
2	M-4	普通円筒	(22.4) 36.9	0.8 0.9	○ 7.8	①△②0.5③25.5 ①△②0.6③14.2	①中粒 ②良好 ③赤褐色 ④1/2	8		①観察不可 ②縫ハケ、突帯貼付 ③基部～胴部：横なで 口縁部：斜めハケ	19
3	M-4	普通円筒	(17.2) 32.6 14.2	0.7 1.2 2.2	○ 5.9	①△②0.5③23.5 ①△②0.6③10.1	①中粒 ②良好 ③淡褐 ④7/8	7		①石回り ②縫ハケ、突帯貼付 ③基部：横なで縫削り、胴部：横なで 口縁部：縫ハケ	19
4	M-4	普通円筒	— — 11.8	— 1.2 2.5	○ 5.5	①△②0.6③26.0 ①△②0.4③14.0	①中粒 ②良好 ③淡赤橙 ④2/3	8		①右回り ②縫ハケ、突帯貼付 ③基部～胴部：横なで 胴部～口縁部：斜めハケ	19
5	M-4	普通円筒	— — 12.8	— 1.2 1.5	○ 5.7	①△②0.4③24.3 ①△②0.5③12.7	①中粒 ②良好 ③赤橙 ④1/2	8		①観察不可 ②縫ハケ、突帯貼付 ③縫なで、縫削り	19
6	M-4	普通円筒	— — —	— — 1.1	○ (6.0)	①△②0.4③11.9	①中粒 ②良好 ③淡赤橙 ④1/2	8		①観察不可 ②縫ハケ、突帯貼付 ③基部：横なで 胴部～口縁部：縫ハケ	19
7	M-4	普通円筒	— — 11.7	— 1.0 1.9	○ 6.0	①△②0.4③26.3 ①△②0.6③16.6	①中粒 ②良好 ③にぶい橙 ④2/3	9		①右回り ②縫ハケ、突帯貼付 ③横なで	20
8	M-4	普通円筒	— — 13.0	— 1.0 2.5	○ (5.4)	①△②0.5③13.5	①中粒 ②良好 ③淡赤橙 ④1/2	7		①右回り ②縫ハケ、突帯貼付 ③横なで	20
9	X7Y3	普通円筒	— — 13.9	— — 1.7		①△②0.5③13.5	①中粒 ②良好 ③赤橙 ④1/5	6		①右回り ②縫ハケ、突帯貼付 ③縫なで、縫削り	20
10	M-4	普通円筒	— — (12.5)	— — 1.7	○ (4.8)	①△②0.6③12.6	①中粒 ②良好 ③赤 ④1/4	6		①右回り ②縫ハケ、突帯貼付 ③横なで	20
11	M-6	普通円筒	— — 12.3	— 0.9 (6.0)	○ (6.0)	①△②0.5③15.0	①中粒 ②良好 ③赤 ④1/4	8		①右回り ②縫ハケ、突帯貼付 ③縫なで、縫削り	20
12	M-4	普通円筒	— — (11.8)	— 1.0 1.5	○ (5.8)	①△②0.6③12.2	①中粒 ②良好 ③胴赤褐 ④1/6	6		①右回り ②縫ハケ、突帯貼付 ③横なで	20
13	M-4	普通円筒	— — 11.3	— — 1.3			①中粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/5	8		①右回り ②縫ハケ、突帯貼付 ③縫なで	20

注) 表の記載は以下の基準で行った。

①胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm以下）、粗粒（2.0mm以上）とした。

②焼成は、極良、良好、不良の3段階。

③色調は上部外面で観察し、色名は新版標準上色帖（小山・竹原1976）によった。

④大きさの単位はcmであり、現存値を記載した。（ ）は復元値である。

⑤縫厚はそれぞれの部分の真ん中で計測した。

⑥透孔の幅にある○は透孔の形を表す。その下の数値は透孔の最大径である。

⑦突帯の厚さは、突帯の一番出っ張っている部分とその侧面との距離で表した。基部から各突帯までの長さは、突帯の中央から基部までの距離で表した。

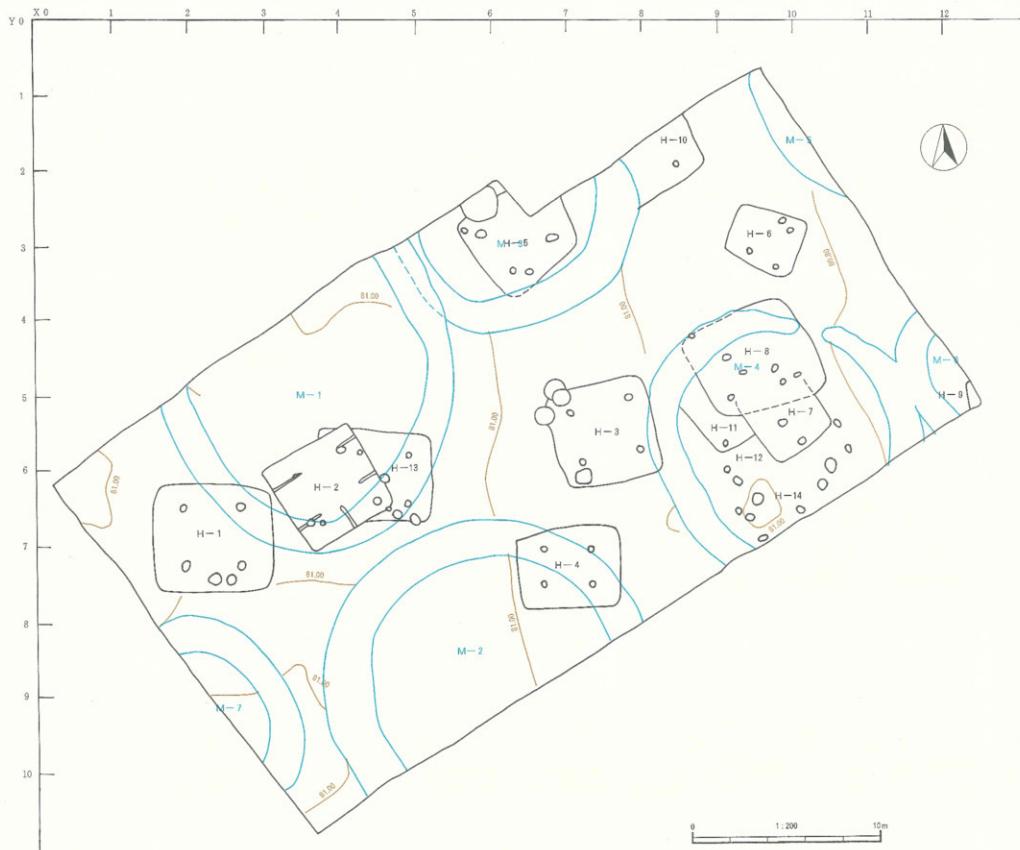


Fig. 5 全 体 図

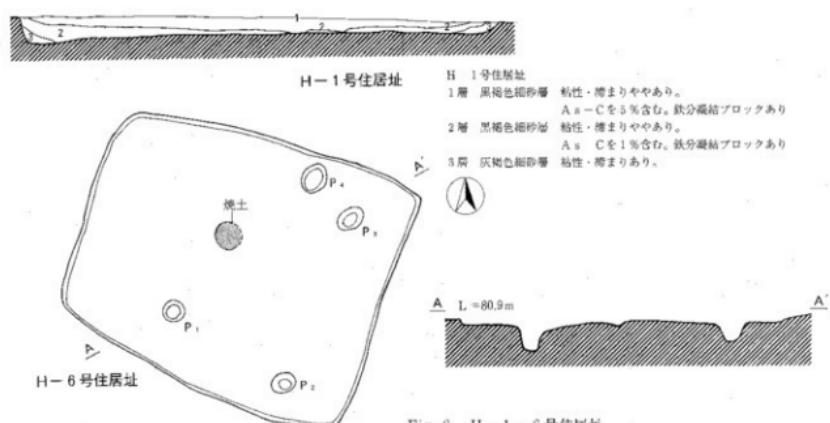
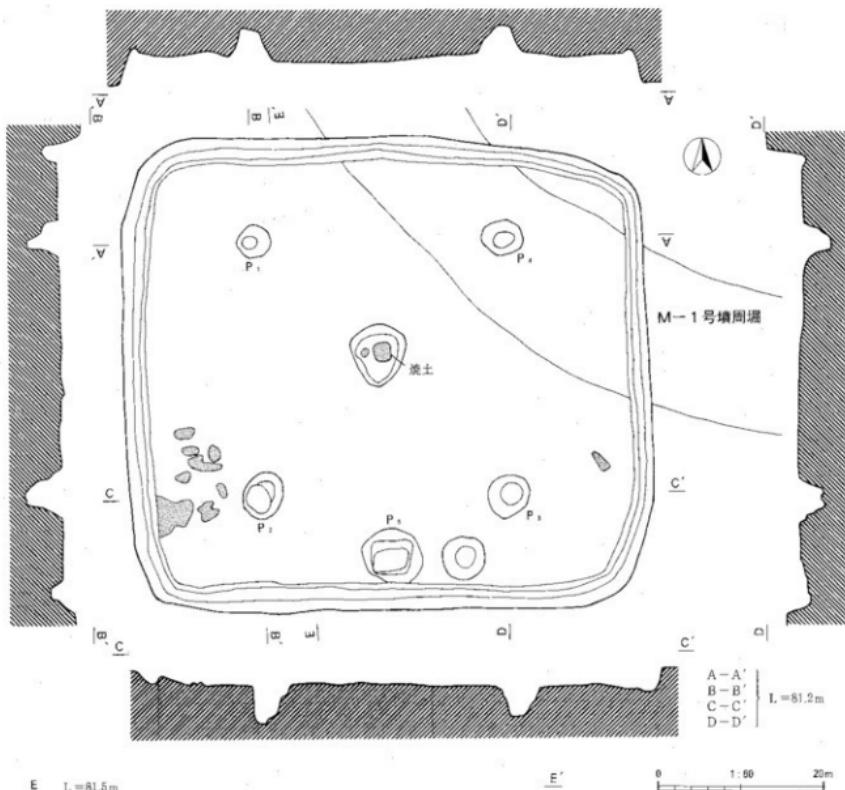
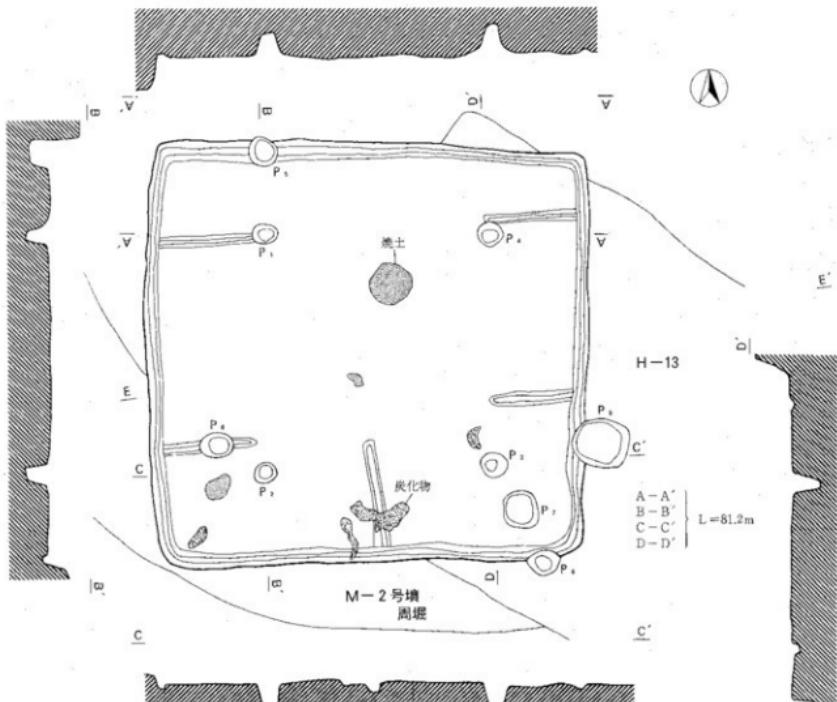


Fig. 6 H-1・6号居住址



(ii) セクションの注記については、Fig.11 H-13号住居址セクション注記を参照。

H-2号住居址

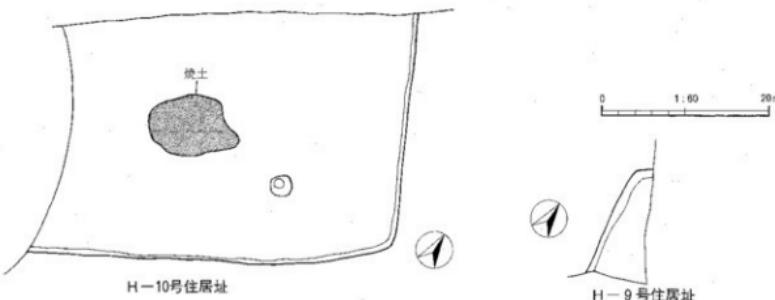


Fig. 7 H-2·9·10号住居址

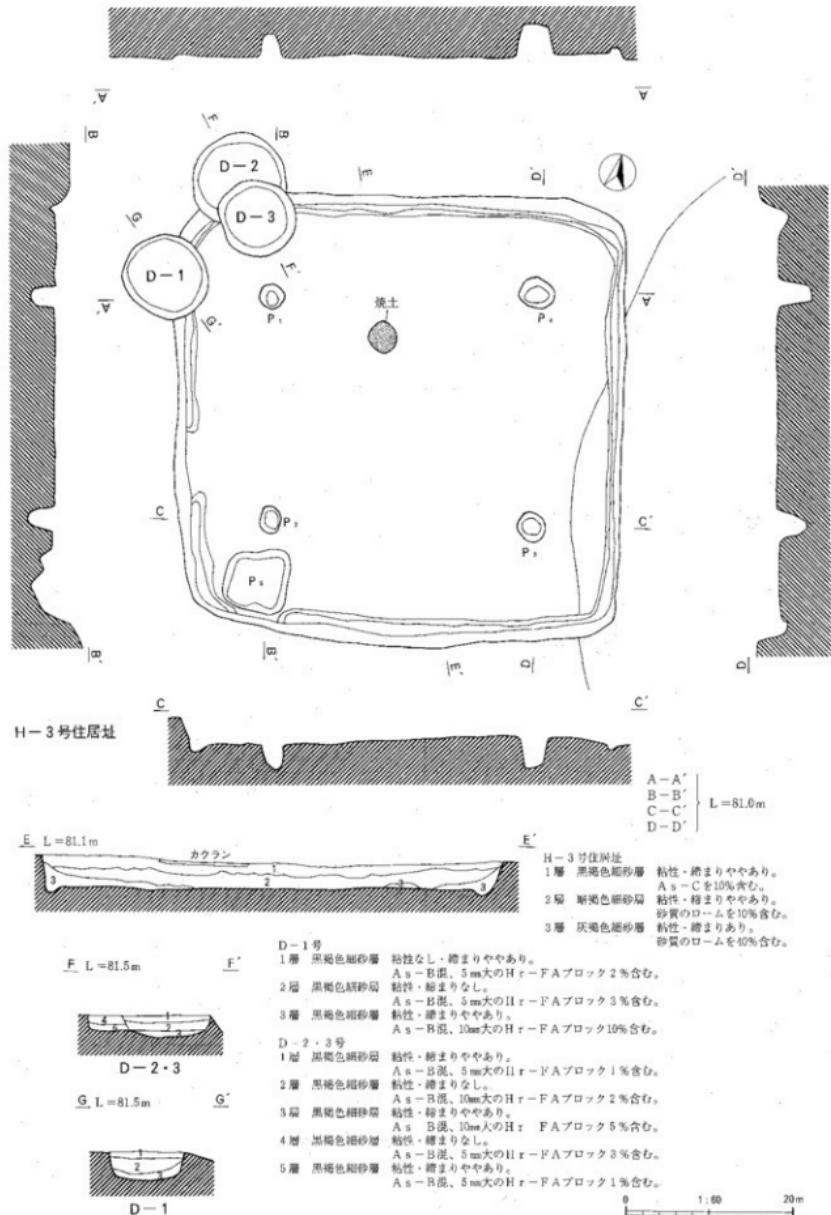


Fig. 8 H-3住居址 D-1・2・3土坑址

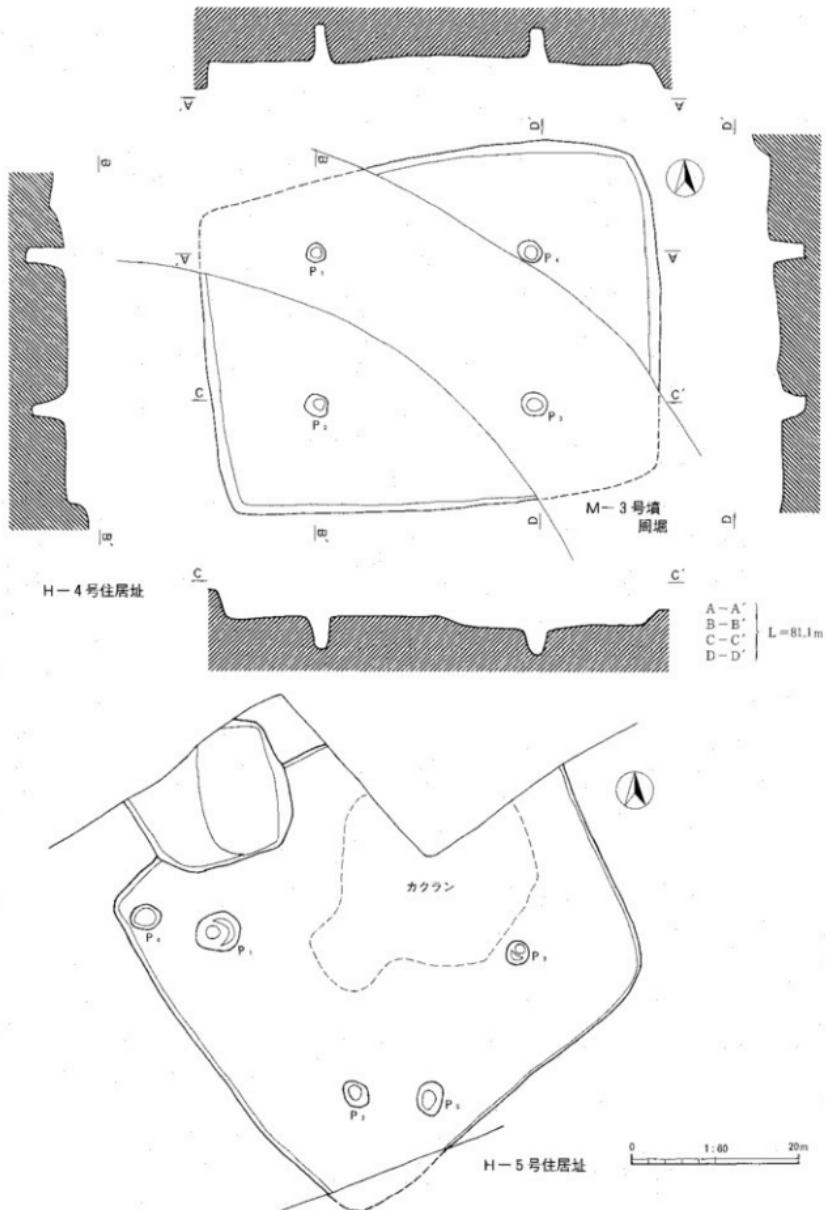


Fig. 9 H-4・5号住居址

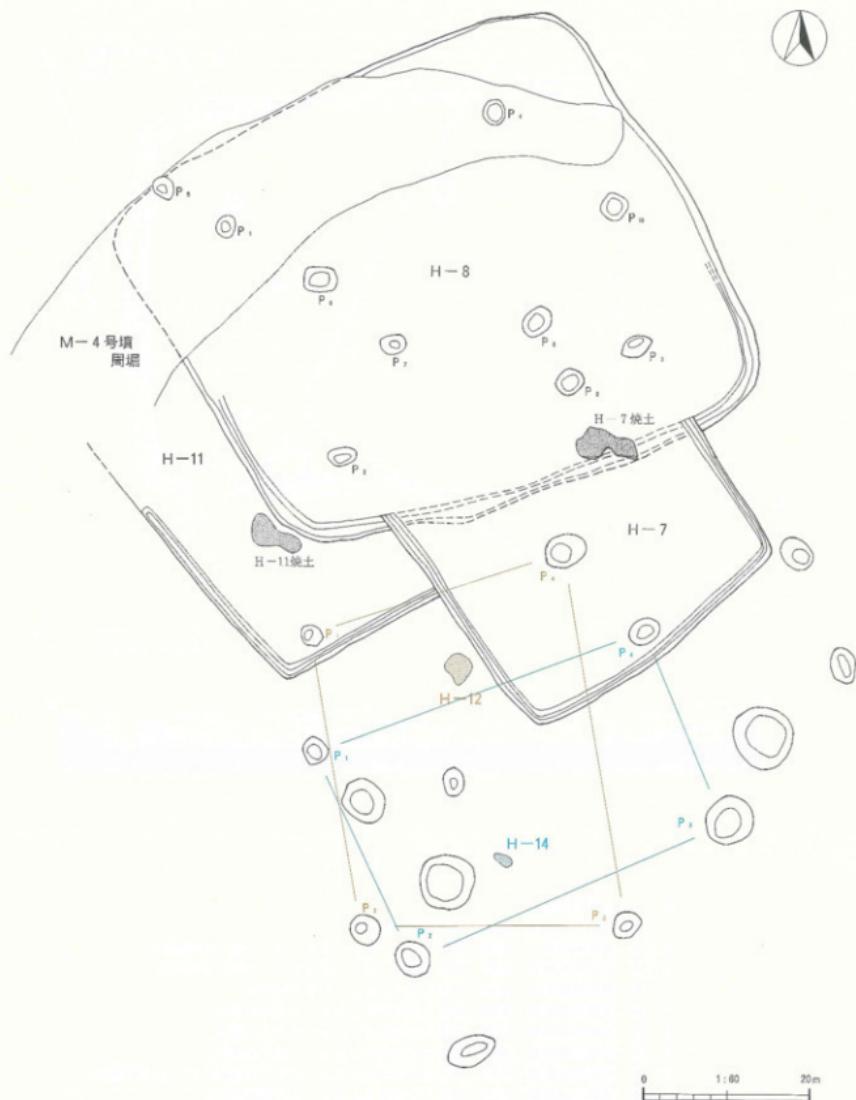
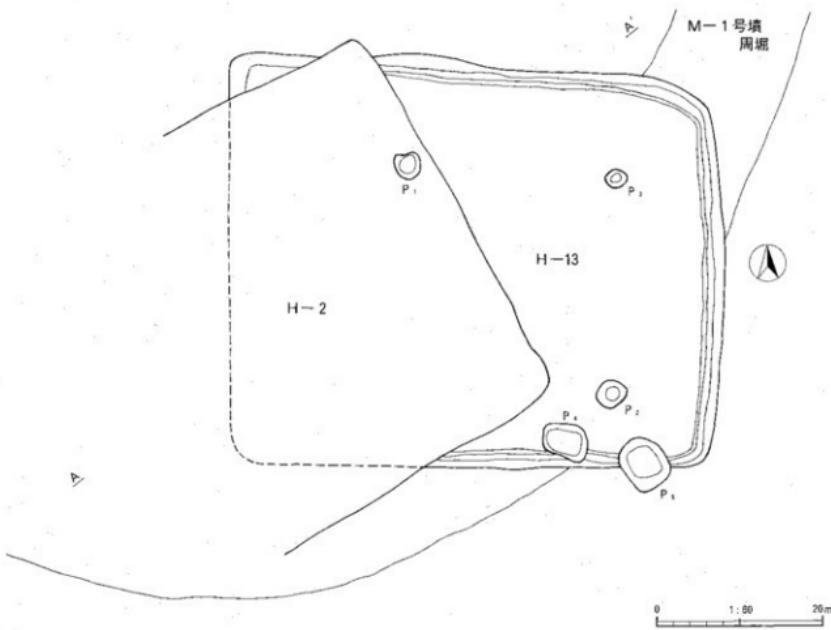


Fig. 10 H-7·8·11·12·14号住居址



- H-2・13号住居址
- | | | |
|------|--------|-------------------------------|
| 1 層 | 黒褐色細砂層 | 粘性・締まりややあり。 |
| 2 a層 | 褐色細砂層 | 粘性・締まりあり。Hr-FA ブロック状に100%含む。 |
| 2 b層 | 暗褐色細砂層 | 粘性・締まりあり。Hr-FA ブロック状に3%含む。 |
| 3 層 | 暗褐色細砂層 | 粘性・締まりあり。As-Cを5%含む。 |
| 4 層 | 黒褐色細砂層 | 粘性・締まりややあり。As-Cを3%含む。 |
| 5 層 | 暗褐色細砂層 | 粘性・締まりややあり。As-Cを3%含む。 |
| 6 層 | 黒褐色細砂層 | 粘性・締まりややあり。As-Cを1%含む。 |
| 7 層 | 暗褐色細砂層 | 粘性・締まりややあり。As-Cを1%含む。ローム3%含む。 |
| 8 層 | 黒褐色細砂層 | 粘性・締まりややあり。As-Cを10%含む。 |
| 9 層 | 暗褐色細砂層 | 粘性・締まりややあり。ロームを5%含む。 |
| 10 層 | 暗褐色細砂層 | 粘性・締まりややあり。炭化物、鉄石を含む。 |

Fig. 11 H-13号住居址

は、石群

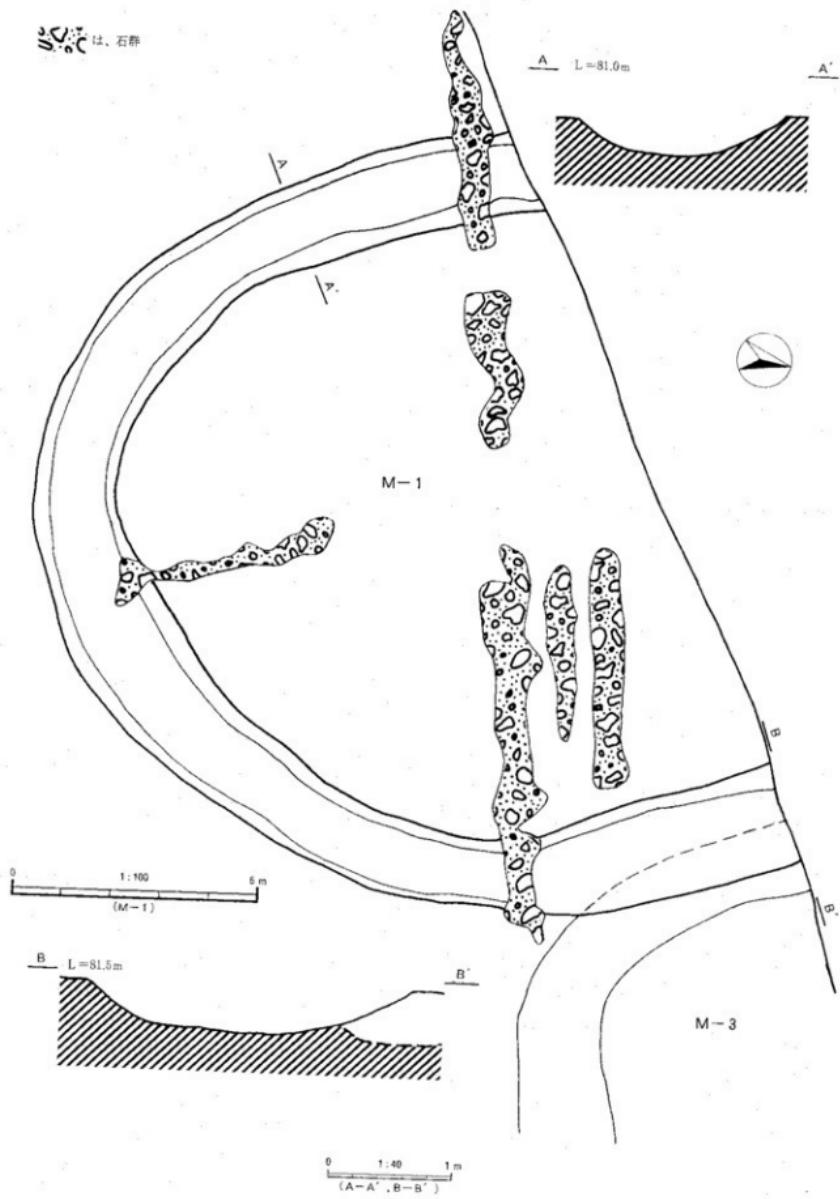


Fig. 12 M-1号墳

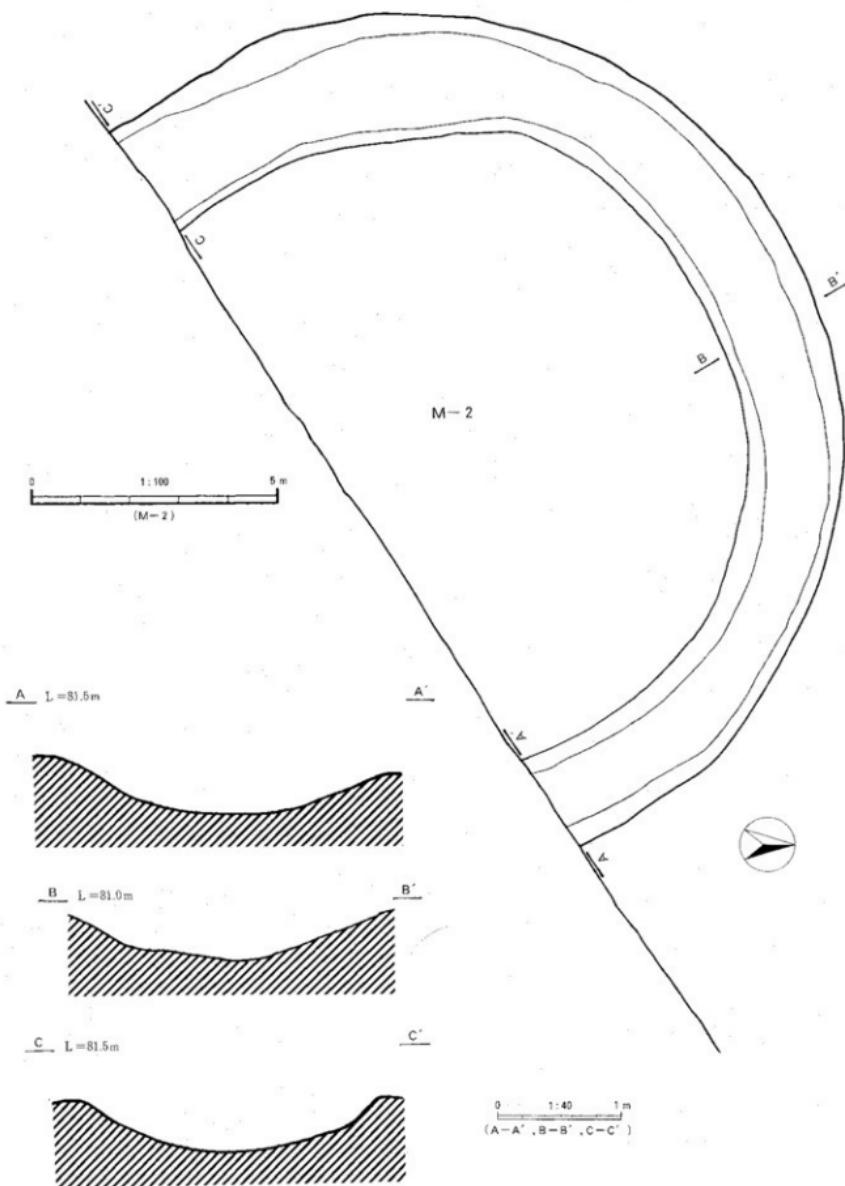


Fig. 13 M - 2 号填

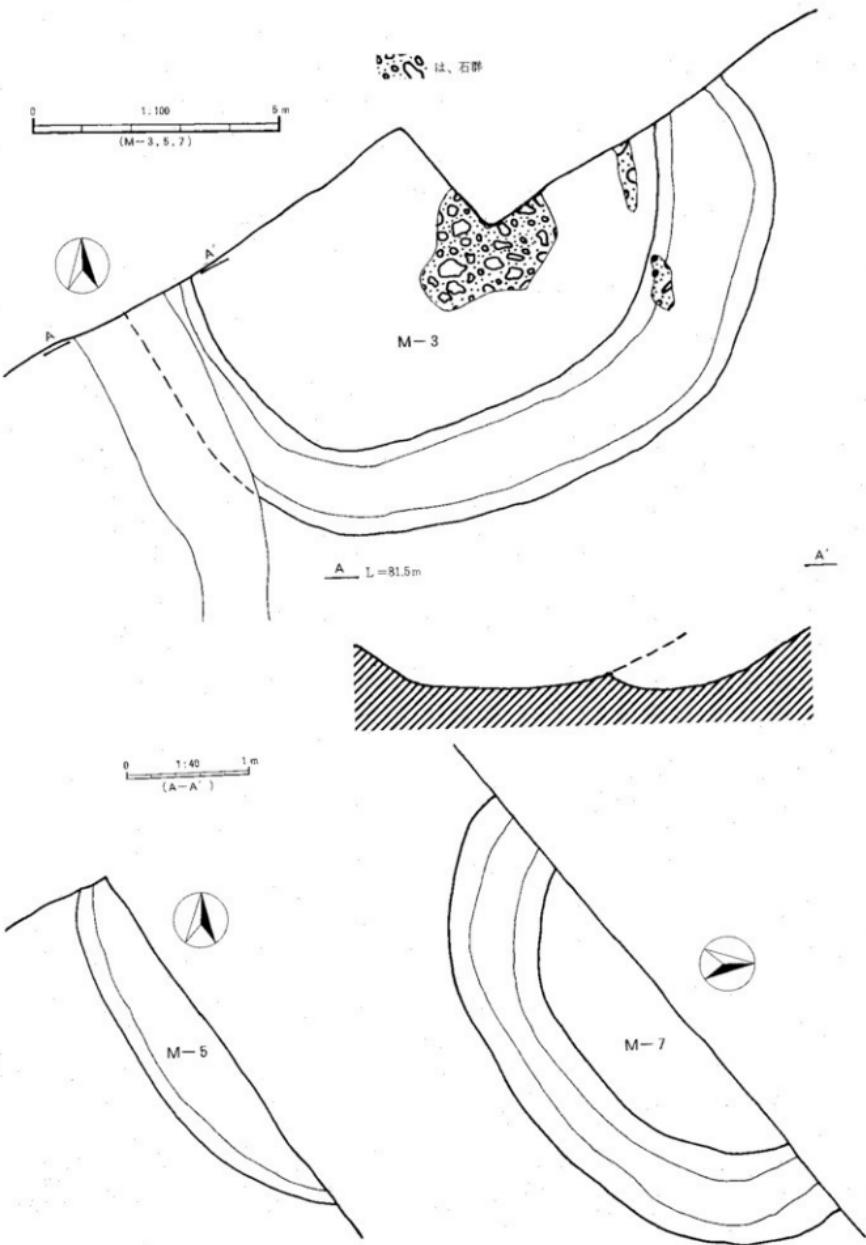


Fig.14 M-3・5・7号墳

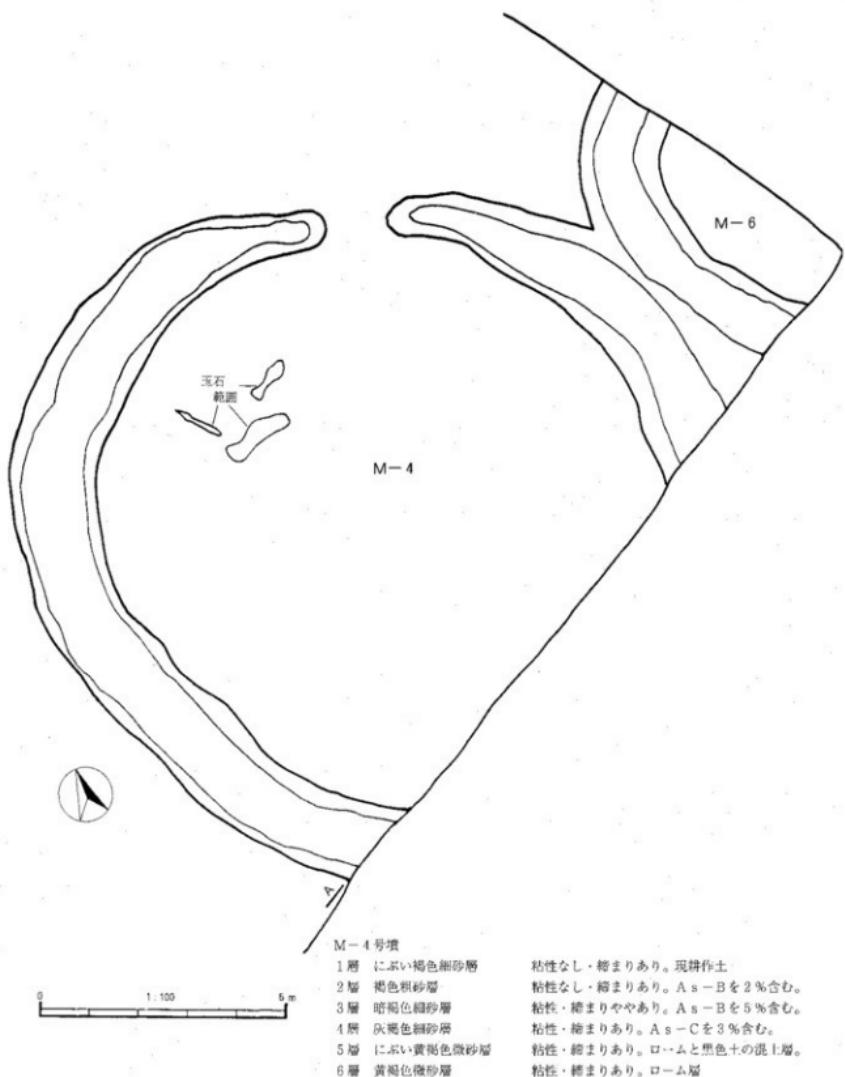


Fig. 15 M-4・6号墳

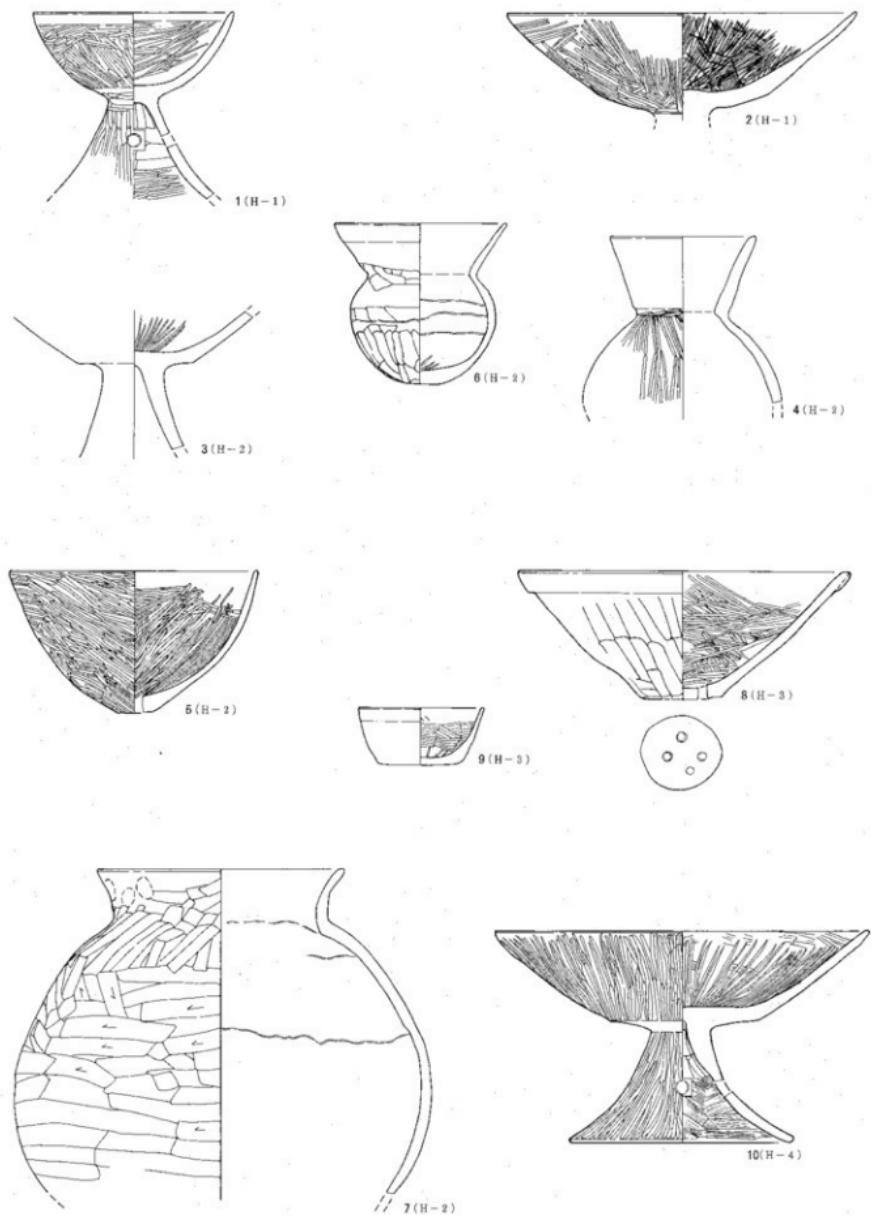
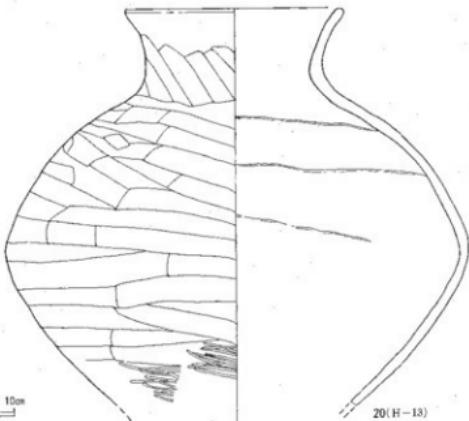
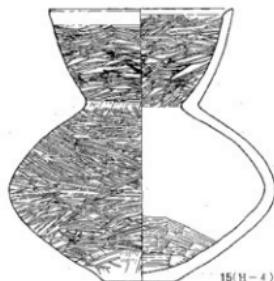
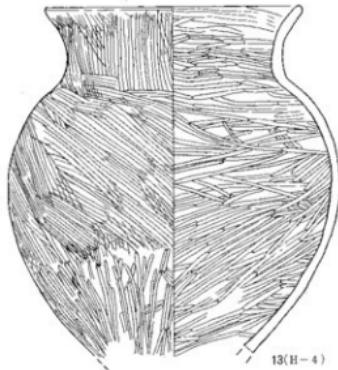
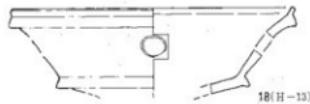
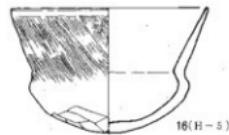
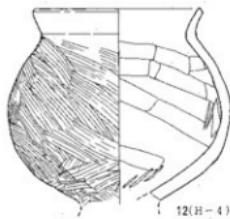
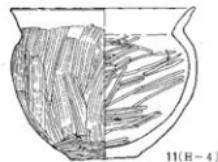


Fig. 16 古墳時代の土器 (1~10)

0 1/3 10cm



0 1/3 10cm
(11, 12, 14~16, 18, 20)

0 1/4 10cm
(13)

Fig. 17 古墳時代の土器 (11~16・18・20)

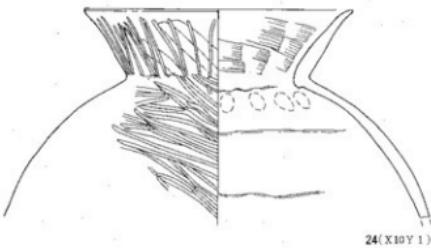
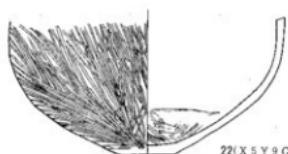
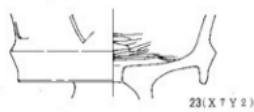
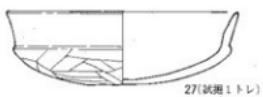
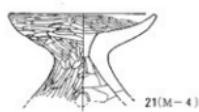
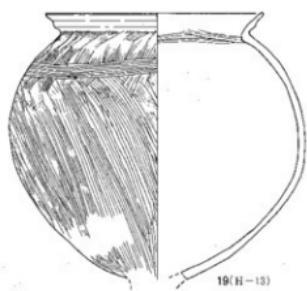


Fig.18 古墳時代の土器 (17・19・21~27)

0 1/3 10cm

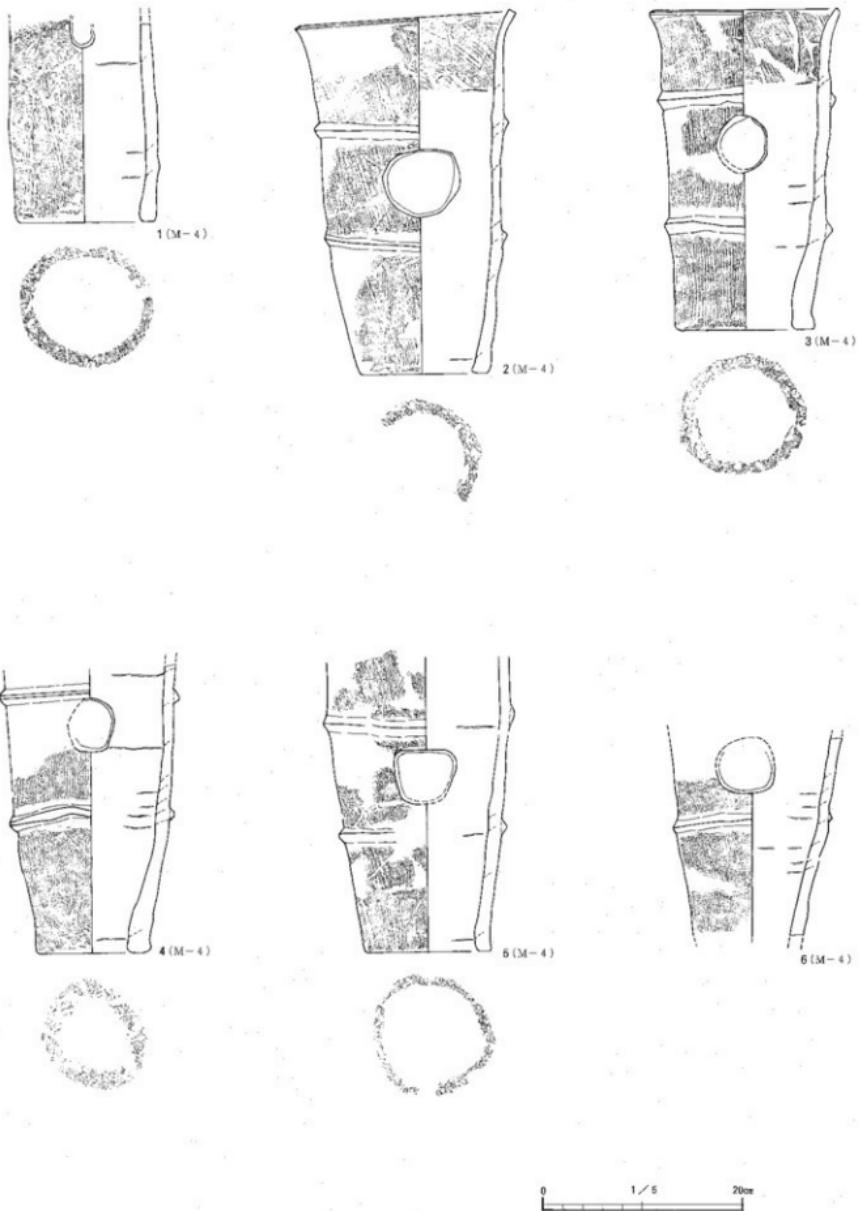


Fig. 19 古墳時代の埴輪 (1 ~ 6)

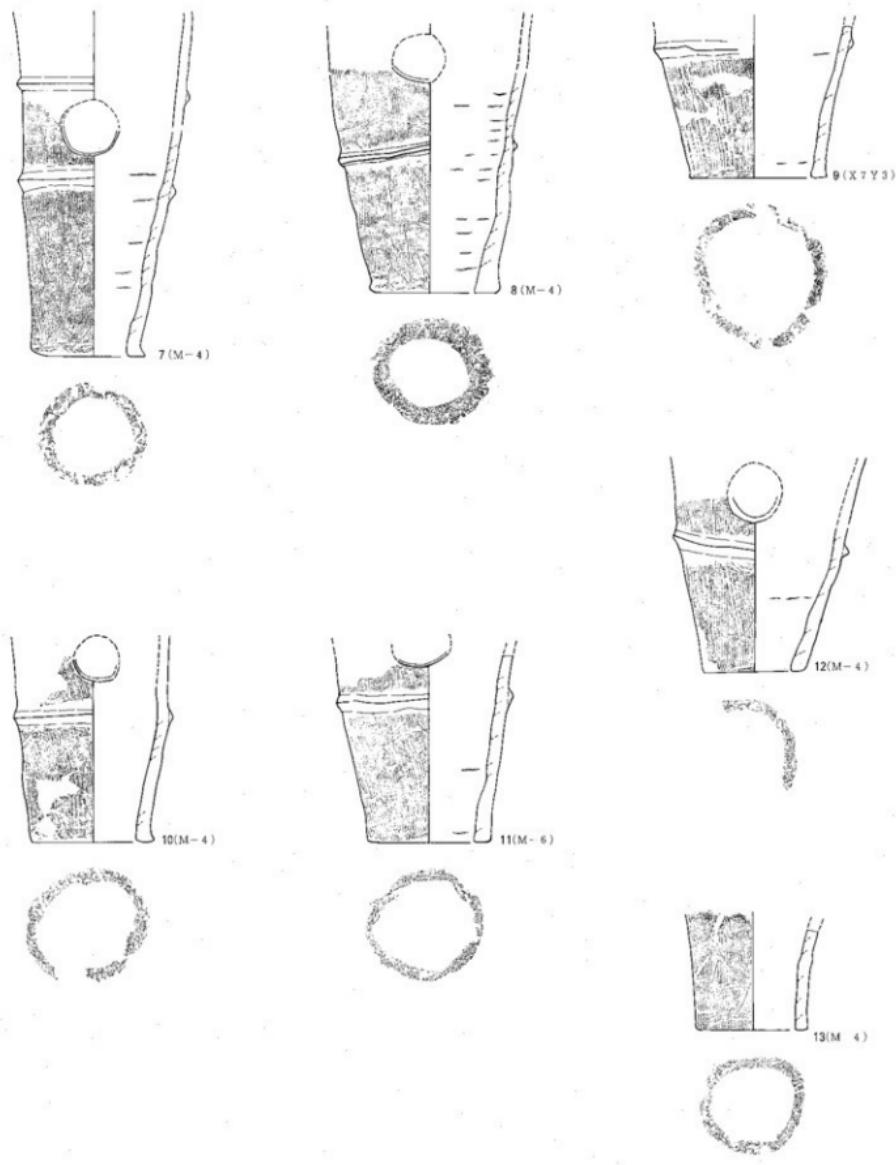
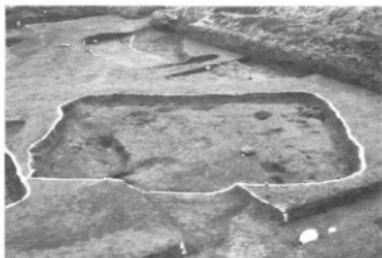


Fig. 20 古墳時代の埴輪 (7~13)



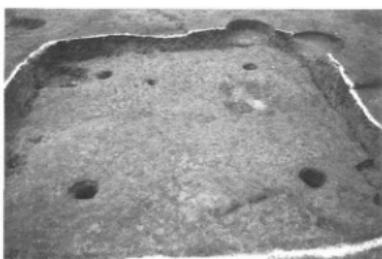
1. 住居跡全景（東から）



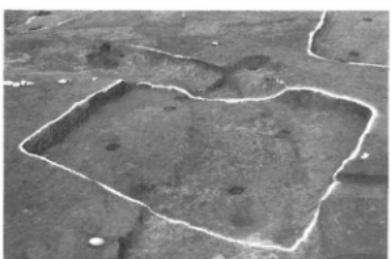
2. H-1号住居址（北から）



3. H-2号住居址（南から）



4. H-3号住居址（東から）



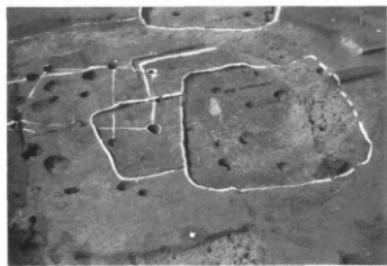
5. H-4号住居址（南から）



1. H-5号住居址（南から）



2. H-6号住居址（東から）



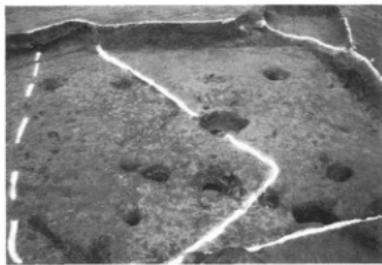
3. H-7・8・11・12・14号住居址（東から）



4. H-9号住居址（西から）



5. H-10号住居址（南から）



6. H-13号住居址（南から）



7. H-2・13号住居址（北から）



8. 調査区西部住居址（東から）



1. 古墳余景（南西から）



2. M-1号墳（北西から）



3. M-2号墳（西から）



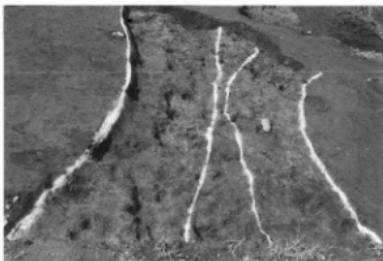
4. M-3号墳（北西から）



5. M-4号墳（東から）



1. M-7号墳（南から）



2. M-4・6号墳周囲（南から）



3. M-2号墳周囲（南から）



4. H-13号住居址出土遺物



5. H-4号住居址出土遺物



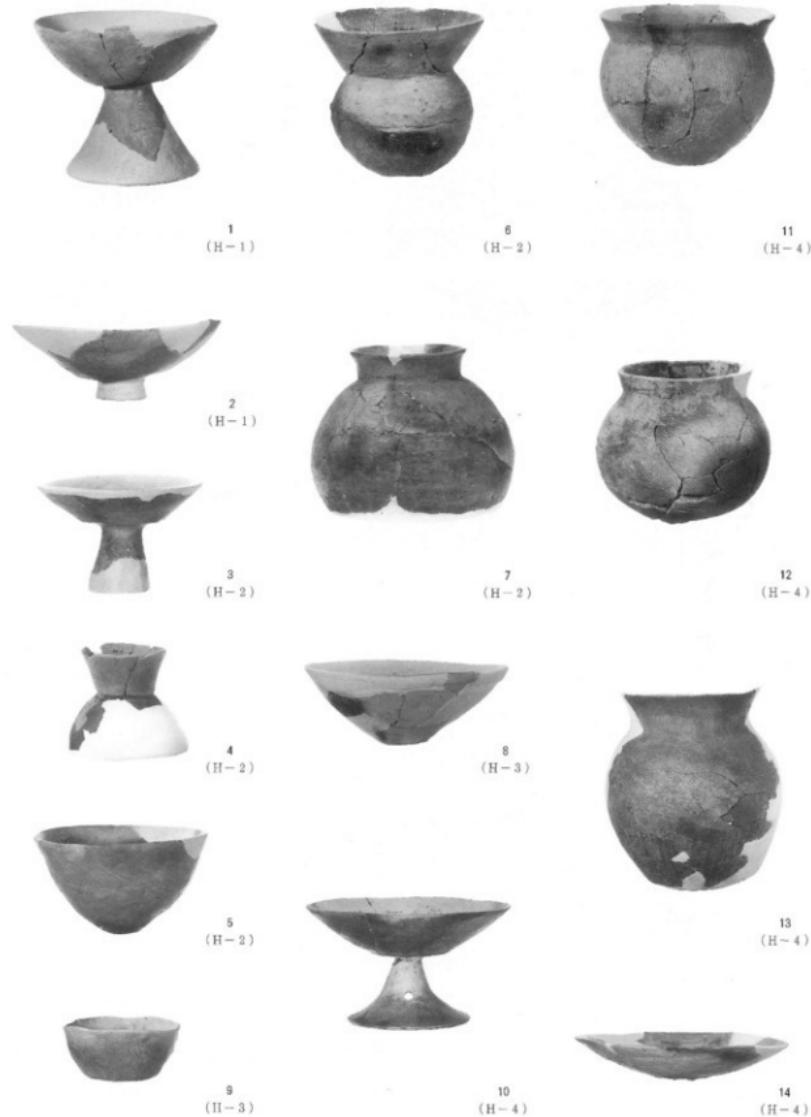
6. M-4号墳出土遺物



7. M-4号墳出土遺物



8. H-5号住居址出土遺物





15
(H - 4)



16
(H - 13)



20
(H - 13)



16
(H - 5)



17
(H - 13)



21
(H - 4)



19
(H - 13)



22
(X 5 Y 9)



23
(X 9 Y 2)



24
(X 10 Y 1)



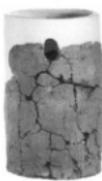
25
(試掘)



26
(試掘)



27
(試掘)



1
(M-4)



4
(M-4)



7
(H-4)



2
(M-4)



5
(M-4)



8
(M-4)



3
(M-4)



6
(M-4)



9
(X 7 Y 3)



13
(M-4)



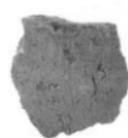
10
(M-4)



11
(M-6)



12
(M-4)



(形象埴輪片)

抄 錄

フリガナ	サンノウワカミヤイセキ
書名	山王若宮遺跡
副書名	老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	飯田祐二 佐藤則和
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0007 群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	西暦1998年3月25日

フリガナ 所収遺物名	フリガナ 所 在 地	コード		位 置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 經			
サンノウワカミヤ 山王若宮	マオバシシサンノウマチ 前橋市山王町	10201	9 G 18	36° 21' 30"	139° 07' 41"	19970901 19970930	966m ²	老人保健施設 建設工事

所収遺跡名	種 别	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
山王若宮	住居址	古墳時代	住居址 14軒		
	古 墳	古墳時代	住居址 7軒		

老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

山王若宮遺跡

1998年(平成10)年3月20日印刷

1998年(平成10)年3月25日発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
群馬県前橋市上泉町664-4

TEL 027-231-9531

印 刷 松本印刷工業株式会社

